原爆ドーム前史

――産業振興機関としてのその変遷――

越前俊也

はじめに

一九一五年（大正四）八月一五日、広島県は県庁所在地の街の中心部に県の地場産業を振興育成するための施設を開館させた。以後一九四五年（昭和二〇）八月六日の被爆まで三〇年間市民に親しまれたその建物は、二度の改名により、三つの館名で呼ばれることになる。当初広島県物産陳列館（一九一五―一九二〇年）と命名され、次に広島県商品陳列所（一九二一―一九三三年）と改称される。そして、被爆一年前までこの建物は広島県産業奨励館（一九三三―一九四四年）と名付けられていた。開館前を含め四つに区分できるそれらの時代は、表1に示すよう、日本が対外戦争を行っていた時期で区分できる期間とほぼ一致する。つまり開館前に日清・日露戦争があり、物産陳列館時代は第一次世界大戦があった。戦間期には商品陳列所と称され、産業奨励館時代は十五年戦争期にあたる。この四期に分かれる時代、広島はそれぞれの戦争の影響をもろに受けた街であった(1)。そして当該施設の館名変更は、それに呼応

表1　広島県立の陳列所と日本の対外戦争対照表

西暦	広島県立の陳列所関連	日本の対外戦争等
1891	広島商業会議所設立	
1894		日本による台湾統治
1895		日清・日露戦争
1902	商業会議所「商品陳列所設置ノ建議」提出	
1904	開館前	
1905		
1910	市議会「物産陳列所設立ニ関する意見書」提出	日韓併合
1911	広島県物産陳列館建設計画四ケ年計画予算化	
1912		
1913	知事寺田祐之が陳列館設計者にレツルを指名	
1914	広島県物産陳列館起工	第一次世界大戦
1915	「広島県物産共進会」第一会場として開場	
1916	『広島県物産陳列館報告』発行	
1917	広島県物産陳列館	
1918	「全国玩具文具展覧会」開催	
1919	「似島獨逸俘虜技術工芸品展覧会」開催	
1920		戦間期
1921	「第四回全国菓子飴大品評会」開催	
1922	広島県商品陳列所	
1923		
1924		
1925		
1926		
1927		
1928		
1929	昭和美術展開催（昭和産業博覧会不参加）	
1930	「合理化展」「輸入品国産品対比展覧会」	
1931	「輸入品国産品対比展覧会」（前年に続き2度め）	満州事変
1932	「勅諭拝受五拾年記念時局博覧会」開催	満州国建国
1933		十五年戦争
1934	大連、新京、哈爾濱に事務所開設	
1935		
1936	「芸州美術協会展」開催	
1937	「芸州美術協会傷病将兵士慰問献画展」開催	盧溝橋事件
1938	広島県産業奨励館	
1939		
1940	「聖戦美術展覧会」開催	
1941		大東亜（太平洋）戦争開戦
1942	「聖戦美術傑作展」開催	
1943	「大東亜戦争聖戦美術傑作展」開催	
1944		
1945	内務省中四国土木出張所等	敗戦

するものであった。

現在、原爆ドームと呼ばれる廃墟となったこの施設が如何なるものであったのかという関心は、その存置が決定してゆくなかで高まりをみせ、そうした疑問に対する回答は、これまで主に建築家と建築史家たちによって寄せられてきた。そしてこの建物の構造と様式あるいは設計者の経歴と業績に関する調査と研究が進み、成果が報告されている(2)。それに対し、この施設の成立事情や開館後の業務内容に関しては、県史や商工会議所史、あるいは原爆ドーム

関連の企画展図録等に基本となる史料が認められるものの[3]、それらを総括した分析や検討は充分になされていない。

本稿は、これら建築に関する研究成果と館の成立と運営に関わる基本文献を踏まえ、同館の歴史を開館前と異なる館名の時代ごとに紐解いていくものである。そうすることによって、先に述べた戦争期間に対応するそれぞれの時代に広島の資本家と地方官僚がこの街と県をどのように舵取りし、それに対して住民がどう反応したかに対しスポットをあてる。本稿が目指すところは、建物ではなく、機関としてのこの施設の内実に迫ることにある。

第一章では、同館が広島の軍需産業化に歯止めをかけるため企図され、都市生活者の憩いの場として設計されたにもかかわらず、その最初の陳列は上意下達式であったことを指摘する。第二章では、物産陳列館時代、同館が広島の貿易振興策として玩具・木竹工芸・広告図案に力を注いでいたことに注目する。また、第一次大戦の落とし子として、この時期に開催された全国玩具文具展とドイツ兵捕虜による展覧会を取り上げる。第三章は、商品陳列所時代の動向として皮肉なことに、この時期商品陳列が減り、文化催事が増えたこと、主催者と来場者の商品に対する志向性に乖離が生じたこと、そして館の方針が貿易振興から保護主義に転じたことを取り上げる。第四章の産業奨励館時代は、大陸に出兵、移住した日本人に向けた県産品の販売が「産業奨励」の実態であったこと、商品に代わりこの施設を飾ったのは美術であったこと、そして、美術の内容が自発的なものから戦争協力・賛美・陶酔へと転じていったことに注意を払う。

以上のことから、機関として同施設は、貿易による発展を目指す市民の社交場として企図されながら、最終的には大陸侵略を鼓舞する装置になったことが明らかとなる。その過程で眺望がきく館の窓はカーテンで塞がれ、陳列品は

工芸的なモノから美術という名のイメージへと変わっていったことに注意を喚起してゆきたい。

一　開館前の動向＝日清・日露戦争期

一―一　「貿易発展セシムル最良手段」としての発議

一八九一年（明治二四）一月二日、広島に在所がある有力商人二〇名は、時の農商務大臣陸奥宗光から商業会議所の設立許可の指令を受ける。前年九月一二日に施行の商業会議所条例に基づき政府が地方の資本家団体を公認するのは、神戸、名古屋、岐阜に次ぐ四番目で、東京、大阪と時を同じくする全国的にみても早い認可であった(4)。

市域単位の商工業者の意思表示と利益擁護を目的とするこの団体は、資本家の立場から行政に対して意見を述べ、建議を起こす組織である。そうした彼らにとって、道府県や市単位で行政が設置する物産陳列所は、商業会議所の公的意義を地域社会に示す格好の機関であり施設であった。なぜならそれは、地方行政府が①商工業に関する調査と紹介を行い、②同じくその指導・補助・取引斡旋をすると同時に、③参考品や特産品の蒐集と陳列、④展覧会や共進会の開催を業務とする行政機関であったからである(5)。これらの業務は、資本家の考えを広く地域住民に浸透させることに直結していた。先述のとおり全国でもいち早く商業会議所を設立した広島の有力商人たちは、その建設を早くから志すが他府県に遅れをとる(6)。『広島商工会議所九〇年史』はその理由を、日清戦争期（一八九四―一八九五年）の好景気とその後の反動恐慌がこの街の経済を安定させなかったためとしている(7)。

一九〇二年（明治三五）六月二四日、広島商業会議所会頭の桐原恒三郎（きりはらこうざぶろう）は広島県知事江木千之（えぎかずゆき）に「商品陳列所設置

ノ建議」を提出する。その書き出しは「実業経営ニ資スル一方法トシテ県下ニ物産陳列所ノ建設ヲ必要トスル一大事ハ既ニ一般県民ノ認知シテ而カモ之ガ実施ノ希望スル処」というものであった。発議のきっかけは、同年春高松で開催された第八回関西府県聯合共進会を視察した広島商業会議所の所員による報告にあったとされている。そこには「実業ノ改善発達ト物産陳列所若シクハ見本館トノ関係ハ益々接ナルモノ」(8)と書かれていた。この文言から、桐原が建議を起こした理由は「実業ノ改善発達」により「経営ニ資スル」ためにあったことはわかる。だが同時に、そこに業務内容に関する言及がないことから、彼は陳列所の実態を把握していなかったことも物語っている。

それに対し、一九一〇年（明治四三）八月三〇日、すなわち大日本帝国が大韓帝国を併合した翌日、広島市会議長の早速整爾（はやみせいじ）が広島県知事宗像政（むなかたただす）に提出した「物産陳列所設立ニ関スル意見書」には、その設置理由が具体的に示されていた。そこには「県下ノ物産及ビ内外ノ参考品ヲ一堂ニ蒐集シテ之ヲ秩序的方法ニ依リ陳列」するとある。それにより「物産ニ関スル知識ヲ其公衆ニ普及セシメ以テ貿易産業ヲ発展セシムル最良手段」(9)と綴られている。八年前の桐原の「建議」とは異なり、実業改善策を貿易発展に定め、県産品と参考品の比較陳列により物産知識を広め、その照準をはっきりと公衆に定めている。

桐原恒三郎は綿商と醤油醸造業を家業とする商人であった。会議所設立時の発起人の一人であり、一八九二年（明治二五）から五期一〇年間、会頭を務める。一八九三年（明治二六）に広島電燈株式会社、九五年（明治二八）には広島貯蓄銀行を設立して日清戦争とその後の経済変動を乗り切ろうとした。しかし、日清戦後の紡績不振により、広島の経済界における影響力を失っていく(10)。その後を襲い商業会議所会頭に就いたのが後に市会議長、最終的には大蔵大臣にまで上りつめる早速整爾であった。彼は苦学して東京専門学校を卒業した後、一八八九年（明治二二）に芸

備日日新聞社主・早速勝三の養子となり社長兼主筆として活躍していた。一九〇二年（明治三五）三月二五日の商業会議所法公布により権限を失っていく桐原ら維新以来の老舗商人に代わり、納税額と資本金の多さ、また営業規模の大きさによって広島経済界の主導権を握る立場になっていた(11)。

早速は、日露戦争後、人口流入が激しくなった広島の都市部に生まれた中間層のインテリと一部の商工業者からなる政治団体を組織し、実業発展の見地から行財政改革と廃減税を訴える運動を起こす。韓国併合直後に「意見書」を提出した理由は、早速らがこの時期、軍拡路線を進める藩閥勢力や、それに追随する立憲政友会との対決姿勢を強めていたからである(12)。「意見書」提出の背景には、早速ら広島の新興財界人が、大陸や南洋との商取引の増大を望む一方、この街の軍需産業化がこれ以上進展しないよう歯止めをかける意味合いがあった(13)。彼らが「物産陳列所設立ニ関スル意見書」を提出した狙いは、軍需ではなく貿易によって広島が発展することにあった。

一―二　都市部に建つ水辺の社交場――設置者と設計者が求めたもの

一九一〇年（明治四三）の「意見書」を受け、広島県会ならびに知事の宗像は次年度から四ケ年で物産陳列館を建設する計画を予算化する。『広島県統計書』に載るその総額は一一万四〇四円であった(14)。宗像は郷里熊本で徳富蘇峰とともに政治結社相愛社に所属し、自由民権運動を推進した経歴を持つ人物であった。一八九四年（明治二七）の第四回衆議院総選挙では熊本五区で立憲自由党から立候補して当選する。その後、知事を歴任していた。つまり、早速整爾とは政治信条が近い位置にあった。宗像の迅速十全な予算措置の背景には、こうした民権主義的共感があったとみても良いだろう。しかし、陳列館建設計画初年度の終わりにあたる一九一二年（大正元）三月二八日、宗像は熊

本県知事へ転出となる。時の首相は立憲政友会総裁の西園寺公望であった。

藩閥派の知事中村純九郎の一年の在任をはさみ、一九一三年（大正二）二月二七日、宮城県知事の寺田祐之（てらだすけゆき）が広島県知事へ転任となる。それにより建設計画の具体化が進む。寺田は警察畑出身で行政手腕に長け、外国人観光客誘致を目的とした宮城県松島湾沿岸一帯の公園化構想で実績を挙げていた。その目玉として建設した松島パークホテル（図1）の開業（一九一三年八月一五日）前に転出を余儀なくされた余勢を広島県に持ち込むかたちとなる。同年七月には同ホテル設計者のヤン・レツル（Jan Letzel, 1880-1925）を物産陳列館の設計者に指名する。レツルは同年一〇月四日にその図面と仕様書一式を広島県庁に発送する。翌一九一四年（大正三）一月には施工者が決まり、同月下旬に着工となる。一九一五年（大正四）四月五日に広島県物産陳列館（図2）は落成式を迎えた。こうした経緯やレツルの日本における業績に関しては、菊楽忍や頴原澄子らの研究に詳しいため、その詳細はそれらに譲る[15]。ここでは、二名の別の研究者による指摘に基づきながら、この建物創建時の特徴に注意を喚起しておきたい。

図1　松島パークホテル

図2　広島県物産陳列館（左奥に広島商業会議所が見える）

その第一は建築史家・杉本俊多によるものである[16]。杉本によれば、レツルが広島県物産陳列館の設計をしていた時期（一九一三年七月から一〇月初めまで）、彼の故国では二つの「水辺の建築」の作例があった。一つはレツルの母校プラハ工芸美術学校の師ヤン・コチェラ（Jan Kotěra, 1871-1923）が設計したチェコ中北部の都市フラデツ・クラーロヴェー市の市立博物館（図3）である。市街地を流れるラーベ川に面した敷地に建つこの博物館は、広島の陳列館と「同様の構成とファサード景観」を持ち、「水辺建築としてのデザイン手法について、両者の共通性は注目に値する」ものであった。もうひとつはプラハの学校におけるコチェラの前任者フリードリヒ・オーマン（Friedrich Ohmann, 1858-1927）が設計した現在はイタリア領内メラーノにある温泉場保養施設（図4）である。こちらは小川沿いの散策路に面して造られた。それは「玄関部に見られるネオ・バロック様式の大げさなヴォリューム表現、そして曲面をなして張り出すファサード、採光窓を備えたドラムとドームの構成など」が広島の陳列館と共通していた。コチェラの博物館は、一九〇四年か〇五年、すなわちレツルが故国を離れ来日する一九〇七年より前に設計が始まり一九一三年に完成する。オーマンの保養所は、一九一三年に工事が始まり同年末に完成した建築であった。したがって、これらの設計と広島の陳列館との関係は、直接的影響か同時代的現象か断定することはできず、杉本も答えを出していない。とはいえ、レツルの故国で彼に近い建築家が同時期に「水辺の建築」を手がけ同様の建築様式を示していたという事実は紛れもない。まして、松島パークホテルで「水辺の建築」を建てたばかりのレツルがこの時期、広島においても「水辺」に正面を向ける建築に執着したことは容易に想像がつく。

広島県物産陳列館の建設にあたり敷地の確保は広島市が行った。確かに広島市総務課土木係が相生橋と元安橋の間の元安川岸の埋め立て工事を始めたのは一九一三年（大正二）一月、すなわち寺田が広島県知事に着任するひと月前

である。ただそれが陳列館の敷地として周辺民有地の家屋解体工事と結びついたのは、同年七月のことであった[17]。これはレツルが陳列館設計のため広島を訪ねた時期にあたる[18]。したがって、敷地内の陳列館の配置を決定する上で、寺田とレツルの意向が働いた可能性は充分高い。彼らには、これから建てる陳列館の正面を陸軍の練兵所や広島駅がある陸側ではなく、川に面する「水辺の建築」とする理由があった。設置者の寺田には松島パークホテルの実績があり、その設計者でもあるレツルには故国の建築家の同時代の建築様式に同調する絶好の機会であったからである。正面を「水辺」に向けることによって、この「陳列所」には、ホテルや保養施設のような「社交場」としての要素が加えられたのである。

図3　フラデツ・クラーロヴェー市立博物館

図4　メラーノ温泉場の保養施設

第二の指摘は、外地を含めた日本の陳列所を網羅的に調査研究した三宅拓也によるものである[19]。三宅の分析によれば、広島県物産陳列館は、柵で囲って門を構え、本館周囲に庭を設ける明治期陳列所の特徴（図5）と、諸機能を一棟に集約して高層化する大正後期以降に現われた都市部陳列所の特徴（図6）を併せ持つ、類まれな建造物であった。さらに、地下に厨房室があり、川に面した一階会議室に隣接して配膳場もある会議場における

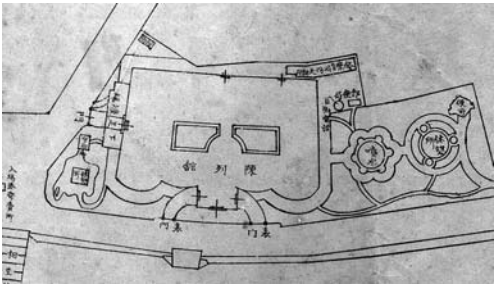

図5　広島県物産共進会第一会場（広島県物産陳列館敷地）平面図

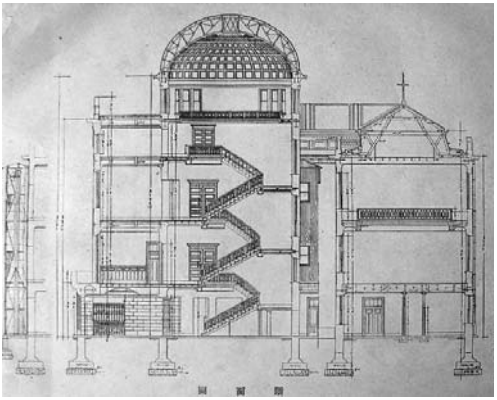

図6　広島県物産陳列館立面図

会食を前提としたつくりをしていた。また、建物中央に位置する楕円形ドームの下の五層吹き抜けの螺旋階段と、一部を吹き抜けにした大きな窓を持つ陳列室など「他には例を見ない豊な空間を有する」陳列所であった。

先に見たよう設置者の寺田と設計者のレツルには、この時期「水辺の建築」に執着する理由があった。その外観は柵に囲われた和洋二種の後庭を備える懐古的な要素を抱え、その内観は五層吹き抜けの階段室をはじめとする複雑で豊かな室内空間を特徴とした。さらに会議室で食事をとることもできる設計は、単なる物産品を陳列する施設の域を越えていた。寺田とレツルは、和洋の近過去を庭園で懐かしみ、水辺の眺望と食事を楽しみながら将来を語る社交場を広島の資本家と都市中間層のために用意したのである。

一―三　最初の陳列――明治期の博覧会場を引き継ぐ開場

一九一五年（大正四）四月五日の落成式後、この建物は広島県物産共進会の第一会場として公開される。共進会とは、農産物や手工業製品などを一堂に会して陳列し、一般に公開することによってその優劣を示す品評会のことをいう。明治時代初期から行政が主催して、各地の産業発展に貢献することを目的とした催し物であった。道を挟んで北東に位置する陸軍の西練兵場がその第二会場となった（図7）。五月一四日までの会期四〇日間で約七八万人がこの催し物に来場する。つまり一日平均二万人に迫る来場者が物産陳列館として開館する前の新築のこの建物に押しかけた。

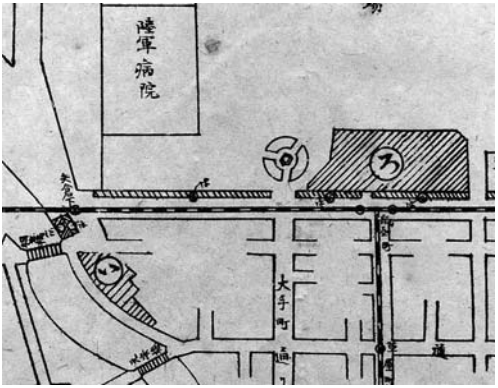

図7　広島県物産共進会会場図（い＝物産陳列館、ろ＝陸軍西練兵場）

この共進会に関し、二〇一六年に発見された出品配置図（図8）により、当時の陳列状況の詳細がわかるようになった[20]。それによると第二会場の西練兵場には農産物と林産物が集められ、物産陳列館には食品と手工業品がならべられた。館内の陳列配置図の詳細を見ていくと、同館一階の左（南側）にあり、陳列館設計上会議室とされていた部屋は審査室とされ、応接室が隣接していた。それと左右対称の位置にある右（北側）の大部屋には農商務省商品陳列館から借用の参考品を陳列するガラスケース三台と他府県参考品を陳列したケース一台が設置されていた（図9）。陳列館の設計では倉庫とされていた右下（北東）の部屋は荷解場とされ、その他も事務室などバックヤードと

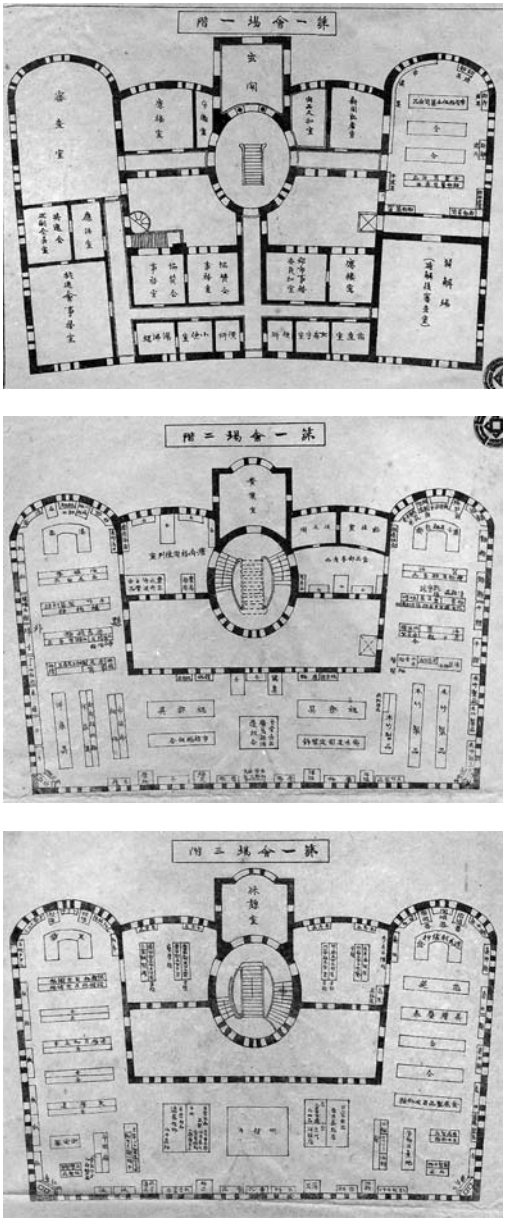

図８　広島県物産共進会第一会場出品配置図

されたようである。二階は、楕円状の階段室に近い左右（南北）の陳列室に清酒と食品が割当てられ、それに隣接する大陳列室には、左（南側）に漆器、陶磁器、木竹製品など手工芸品が、右（北側）には菓子及飴包類、醤油、水産品などの食品類が陳列された。二階の奥（東側）左右には祝祭具が大きな場所を占め、会場に華を添えていた。祝祭具の陳列に挟まれ、三階を吹き抜けとする二階中央の最も見栄えがする場には、県産品の地酒を塔状に積み上げた舞台（図10）が設置され、陳列物全体の花形とされていた。三階に上がると、左（南側）は足袋、綿織物、絹織物など、右（北側）は花筵、莫蓙畳表などの陳列が大きな場所を占めていた（図11）。これらは総じて幕政以来の商工業

者による出品物である。

共進会写真帖に残る陳列状況を写した写真を見ると、これら商品はほぼすべて木製のガラスケースに収められている（図9、図11）。それは明治政府が始めた内国勧業博覧会の物産の見せ方を踏襲するものである。つまり「物産ニ関スル知識ヲ其公衆ニ普及セシメ」るとは、会議室において議論をすることではなく審査をすることであり、審査員が下した優劣の結果をガラス越しに来場者に伝えることであった。都市生活者のための民主的な社交場として企図され、設計された新築のこの建物は、このような上意下達の観覧形式を取る施設として開場したのである。その一方で、同館竣工時の写真を見る限り、その広くとられた窓により、この建物自体が大きなショウケースのような様相を呈している（図12）。ガラスケースに収められた参考品や県産品を観覧する来場者がショウケースのなかを動く様自体が見世物として公衆にアピールしたことが想像できる。

図9　共進会第一会場（物産陳列館）1階農商務省承認陳列館参考品陳列

図10　共進会第一会場2階中央における広島県地酒の陳列

図 11　共進会第一会場 3 階宮島細工陳列

図 12　広島県物産陳列館

この時、広島商業会議所は、共進会に会期を合わせ自らの所屋二階広間を会場にして、「国産奨励品東洋南洋市場貿易品展覧会」を開催した。一九〇七年に竣工していた広島商業会議所所屋は物産陳列館と道をはさんで北向かいにあり（図2参照）、共進会第二会場の西練兵場の西に位置していた。つまり三者は互いに隣接していて、商業会議所で開催された貿易品展は、いわば共進会の第三会場としての役割を果たしたと伺える。とはいえ、入場者は六万六千人ほどで共進会入場者の十分の一にも満たなかった[21]。つまり、ここを訪ねた客は、資本家など一部の者に限られていた。その会場には、「本邦輸入品と之に対比すべき国産品並に支那、南洋及印度市場に於ける欧米諸国よりの輸入品見本六百余点を蒐集した」[22]ものがならんでいだ。この時期、広島商業会議所は、第一次世界大戦の開戦により輸出量が低下した欧州に代わり、欧州製品代用品の生産に力を入れていた。それを中国や南洋、インドをはじめとするアジア・太平洋地域へ輸出することを目標に掲げていたのである[23]。

二　広島県物産陳列館の時代＝第一次世界大戦期

二―一　開館時の陳列状況と貿易戦略

共進会閉幕後、第一会場は非公開となる。三ヶ月の準備期間を経て同年八月一五日に迎えた広島県物産陳列館の開館にあたり、館長の吉田壽信は以下のような式辞を述べている。

本館の出品物は外国参考品三四七点、他府県参考品四三〇点、本県の出品六、四二九点其陳列間数四百五十間に達し予期以上の成績を挙ぐるを得たり。(24)

（文中の読点は引用者による）

ここで吉田がいう、「外国…他府県参考品」の総数七七七は、前節最後で触れた商業会議所主催の貿易品展出品数「六百余点」に一七〇点ほどを足した数、また「本県の出品」数は、共進会総出品数から農産物など第二会場陳列品を引いた六、一七四点(25)に二五五点を足した数となる。これらを三ヶ月の準備期間中に補ったと考えれば、物産陳列館開館時の陳列品は、共進会第一会場の出品物と商業会議所で開催された貿易品展出品物を基礎としたと考えるのが自然であろう。これにより、早速が「意見書」で述べていた「県下ノ物産及ビ内外ノ参考品ヲ一堂ニ蒐集」した陳列が実現した。吉田は、それらを畳に換算して四五〇枚分の棚にならべたことを誇っている。陳列に関しても共進会第

一会場で用いた木枠ガラスケースがそのまま用られたと考えられる。館長吉田の式辞はこれにとどまらず、以下のようにも述べている。

物産陳列館の目的とする所は啻に商品の陳列を為すに止まらず当業者をして自他製品の優劣精粗を比較研究せしむると共に生産消費の関係嗜好需要の変遷等内外経済事情を知悉せしめ由て以って産業の振興を図るにある。[26]

そうした事業展開を進めることを館の使命と宣している。そして、この式辞から一年も経たず一九一六年七月二〇日に刊行された『広島県物産陳列館報告』（図13）には、吉田の弁に違わない産業振興のための具体策が掲載された[27]。その「緒言」には「今や欧米諸国は、鋭意戦時並に戦後の経済に処するの方策を講じつゝあるを以て、将来是等諸国に於ける産業発達は測らさる可らさるものあらむとす」とある。つまり、欧州製品代用品の製造輸出を推奨した一年前の商業会議所の方針とは異なり、戦争終結後の欧州製品復活後を見据えた産業発展のあり方を全体テーマに掲げている。その内容は◉貿易、◉技術、◉雑纂、◉本館記事、◉口絵の五部からなり、そのうち◉貿易の部では「英領印度の外国貿易」「玩具貿易事情」「台湾の重要移出入品」の三項目を挙げている。つまり、内外の動向を調査研究した結果、貿易対象地にはインドと台湾を、今後注目すべき輸出産業として玩具製造を想定したのが、この時期の広島県物産陳列館が導き出した結論と考えられる。

「英領印度」に関する記事によれば、この地を貿易相手先とする理由は、同地が世界人口の五分の一、すなわち約三億の住民を有し、その七割が農業従事者であるため「貿易輸出国として、最も好適地」だからとしている[28]。その

上で綿織物、綿製メリヤス、ガラス製品、マッチの四品目を「日印貿易上、重要なるもの」とし、いずれも欧州製品に価格競争で勝ち抜くことを奨励している。

それに対し「玩具貿易事情」の項目では、日本における四大産地（東京、大阪、京都、名古屋）の現状分析をした上で、その需要国・地域（イギリス、アメリカ、カナダ、インド、ハワイ、中国漢口）の習慣嗜好などの市場調査を踏まえ、低廉安価であるよりも輸出相手先住民の好みに合う質の高い製品製造を推奨している[29]。すなわち、原料は多様であるが少量で済む玩具という製品に伝統工芸の技を含む高い技術を注ぎ付加価値をつけることによって、広島が既存の供給国（ドイツ、オーストリア、フランス）と国内四大産地に対抗できる産地となることを志している。

台湾に関しては、横浜や神戸に較べ広島に地の利がある植民地貿易の相手先として、「輸入」ではなく「移入」がもたらす効果の分析を行っている[30]。要するに広島県物産陳列館が発行した最初の『報告』は綿織物、綿製メリヤスなど既存産業製品の輸出先を印度、原材料の入手元を台湾とする貿易振興と世界市場に向けた将来性ある産業として玩具製造を推奨するという方針を打ち出している。

ちなみに、巻末には同館の「業務要項」が次のように記されている。「参考品陳列。受託販売／調査研究。報告／取引紹介。通信質疑／図書新聞雑誌閲覧／図案調製。巡回陳列」（／は改行）。ここに館名にある「物産陳列」の文言はない。つまり館員の業務として陳列するのは県産以外の「参考品」と「巡回」品に限られていた。質の高い内外の製品を県内業者に例示すること。また県産品の販売や取引を仲介すること。さらには、通信や図案の相談にのり、県外に県産品を広めること。開館一年目の物産陳列館は、こうした業務を自らの職分としていたのである。

図 13　『広島県物産陳列館報告』表紙（上）と奥付（下）、1916年（大正 5）発行

二―二　初期の展覧会―玩具文具展と独逸俘虜展

『報告』発行から一年半あまりが経過した一九一八年（大正七）三月二五日、同館は「全国玩具文具展覧会」を四月一〇日までの期間で開催した。『報告』に掲げた世界市場に向け将来性ある産業を取り上げた企画展である。事実、第一次大戦により世界一の玩具輸出国ドイツの生産が止まり、日本の玩具輸出額は大戦間に三倍に跳ね上がっていた[31]。先に述べた玩具の国内四大産地を含む三府一二県を招致し、一万点に達する出品によって、広島県下の玩具産業を活気付けさせる目論見であったのであろう。同展の模様を当時の新聞は、以下のように報じている。

会場は三階全部を充て其の上り口には玩具の図案を施した大額を掲げ、会場の入口は、玩具部と文具部と別ち、其處には藤花、櫻花、虞美人草の図案を施した本邦貿易玩具の生産額と輸出額、鉛筆、インキの輸出額などの統

計図表を掲げ、大円筒の下には同館の看守連が隙隙に作った大櫻樹を飾り、また酒造組合の広告塔には四本の小櫻を配してある。[32]

ここから読み取れることは、①館三階が今日でいう企画展示室として使われた。②「大円筒」と呼ばれていた五層吹き抜けの階段室が企画展への導入の役割を果たした。③生産額や輸出額の統計図表を示すなど玩具と文具を輸出産業として捉えていたことなどである。「酒造組合の広告塔」とは、同館が開館前に共進会第一会場となった際、二階中央吹き抜けに設置されたもの（図10）であろう。ここに「小櫻」など季節の花をあしらうことによって折々の会場演出が試みられていたことも窺い知れる。同じ紙面には「余興的設備」として次のような記述もある。

背景には元手拭組合の山水を応用して隧道を造り鉄橋を架して玩具電車を運転させたり電力で各種の動物玩具をグラウンド内へ循環的に動かす装置、風車に風を送ればその回転に依って家屋内に点灯する装置などをなし又全国の伝説的玩具を線條で地図と連絡して陳列し両者の関係を示すなど。斬新な趣向を凝らし尚ほ米国製家庭用宝物幻灯器、凹凸面鏡の応用など児童の趣味を感ずる物がある。[33]

同年八月に同館が発行した『内外商工彙報』には、同展出品の「動力に依り玩具電車を運転の光景」（図14）が唯一の写真図版として掲載されている。三年前の共進会では、出品物が明治以来の木製ガラスケースに収められただけであったのに対し、この度の出品物は動いたり、点灯したりすることに加え、ジオラマ風背景や地図を用いた立体展

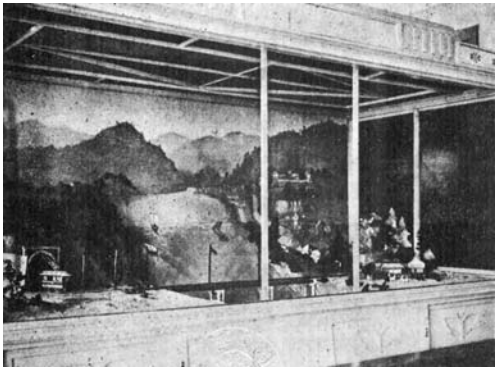

図14　玩具文具展覧会場における電車模型の陳列光景（線路の背景は山間のジオラマとなっている）

示など企画者である同館が随所に来場者の目を楽しませる工夫を凝らしたことが伺える。そして何よりこうした会場演出を記者は好意的に受けとめている。同展には会期一七日間で約七万人が来場した。

それからほぼ一年後、玩具文具展の会期は半分で来場者は二倍を上回る一六万人を記録した展覧会が同館で開催された。「似島獨逸俘虜技術工芸品展覧会」（一九一九年三月四日から三月一二日まで）がそれである。出品者は、第一次大戦中、中国青島に駐留していたドイツ兵であった。捕虜となり日本に連行された四、七〇〇名のうち五四五名が広島湾沖合の似島にある検疫所収容所に収監されていた。似島郷土史家・宮崎佳都夫によれば、彼らの行動は朝晩の点呼以外は自由で、広島市内など地域住民との交流も盛んであった。展覧会に関しては、本文三四頁におよぶ目録（図15）が現存しており、そこから三二六点の出品物の詳細が確認できる。それらは「芸術」「手工芸」「技術」「教育活動」の四分野に分けられ、その中身は絵画や写真から旋盤を使わずに作ったチェス駒やハンモック、蒸気機関車や蒸気船の模型や建築設計図など多岐に及んでいた。加えて捕虜中四六名もいた教師たちが普段広島近隣で開講していた授業プログラムも出展されていた。さらには、展覧会場の軽食堂ではシュナップス、リキュール、香水、薬品が陳列即売されていた（図16）[34]。明治期の博覧会然としたガラスケースの陳列で商品に手を触れることさえできなかった従来の広島県物産陳列館の来場者にとって、その後時折同館で物産即売会は開催

図 15 「似島獨逸俘虜技術工芸品展覧会」出品目録表紙

図 16 似島獨逸俘虜技術工芸品展覧会即売会場

されたものの、そこにあるものを食し、味見した上で購入できるシステムは画期的であり、衝撃的でさえあったと想像される。

明治以来来日してきた限られた数の技術官僚や教師ではなく、数百人規模の市井の欧州人の長期にわたる滞在は、彼らの文化を広島市民に身近なものに感じさせたに違いない。そのさらなる窓口として本展の果たした役割は大きい。さらに即売や食堂の開設が従来の陳列室にない身近さを来場者の記憶に刷り込んだことも重要であろう。一日平均にすれば開館前の同館で開催された共進会のそれに匹敵する一万九千人に迫る入場者数がその反響の大きさを物語っている。

二―三　玩具・木竹工芸・広告図案――物産陳列館時代に推奨された産業

表2に掲げる一覧は、二〇一〇年に広島県立美術館で開催された展覧会「廣島から広島――ドームが見つめ続けた街展」に際し発行された図録に掲載された菊楽忍編「広島県物産陳列館年表」から同館が物産陳列館と名乗っていた

表２　広島県物産陳列館で開催された共進会・品評会・展覧会（1915. 4. 5.-1920. 12. 31）

No.	催事名称	会期もしくは期日	備考
0	広島県物産共進会（第一会場）	1915.4.5 - 5.14	第二回場：西練兵場
広島県物産陳列館開館		1915.8.15	館長：吉田壽信
1	広告資料展覧会	1915.10.10 - 10.25	
2	御大典奉祝記念事業　菓子品評会	1915.11.14 - 11.19	
3	第ｉ回柑橘展覧会	1916.1.10 - 1.16	
4	全国学用品展覧会	1916.3.? - ?	
5	① 新日本博物展覧会	1916.3.29 - 4.14	3階一部
6	木工品評会	1916.4.21 - 5.5	3階
7	計量器展覧会（度量衡展覧会）	1916.4.26 - 4.30	
8	② 美術展覧会（県下絵画彫刻展覧会）	1916.5.15 - 5.30	
9	図案応用作品展覧会	1916.10.1 - 10.30	
10	広島県副業品展覧会	1916.11.3 - 11.19	庭：菊花展、打ち上げ花火、館内にて楽隊演奏
11	広告絵札展覧会	1917.3.15 - 3.21	3階、11.18, 11.19夜間開館
12	染地品評会（広島染地研究会）	1917.4.22 -4.23	
13	③ 広島県美術展覧会	1917.5.1 - 5.15	5.5, 5.6夜間開館、会議室：生花展示
14	④ 女子手芸品陳列	19176.1 - 6.15？	
15	広島県発明展覧会	1917.6.1―6.17	5時まで開館時間延長
16	第3回国産巡回展覧会（国産奨励会）	1917.7.13 - 7.14	
17	提灯傘及竹器展覧会	1917.8.1 - 8.10	
18	手拭品評会（広島染地研究会）	1917.8.2	
19	全国特産品展覧会	1917.10.20 - 11.10	各種売店出店、10.31-11.2夜間開館
20	第2回広島県染地品評会	1917.11.12 - ?	
21	県下味噌品評会	1917.11.22 - 11.25	
22	広島県果実品評会	1918.2.15 - 2.20	
23	全国玩具文具展覧会	1918.3.25 - 4.10	3階
24	⑤ 第3回広島県美術展覧会	1918.5.1 - 5.15	5.8から5時まで開館時間延長
25	全国林産工芸参考品展覧会	1918.10.1 - 10.14	
26	広島県林産業工芸品品評会	1918.10.1 - 10.14	3階　似島俘虜製作品も陳列、10.12―13盆栽陳列
27	⑥ 小品画展覧会	1918.11.1 - 11.10	10.31内覧会　会議室：投入花陳列のみ夜間開館
28	商品包装紙レッテル展覧会	1919.1月 - 2月末	
29	第1回漉海苔品評会	1919.2.24 - 2.26	庭：海苔製造実演、2.26講演会
30	⑦ 似島独逸俘虜製作品展覧会	1919.3.4 - 3.13	3階、開館以来最高入場者
31	広島県生花競技会	1919.3.15 - 3.16	3階
32	広島味噌品評会	1919.3.24 - 3.27	2階
33	広島県染織工芸品評会	1919.3.31 - 4.6	3階、4.3褒賞授与式
34	レッテル包装及びチラシ図案展覧会	1919.4.13 - 4.24	
35	⑧ 第4回広島県美術展覧会	1919.5.1 - 5.15	4.30内覧会
36	商品陳列会	1919.9.20 - 9.30	広島産品に限定せず商品を百貨店式に販売、9.26から夜間開館
37	広島市内特産品品評会	191910.15―10.21	
38	広島市重要物産品評会	1919.11.11 - 11.16	夜間開館、11.15褒章授与式
39	菊花展覧会	1919.11.11 -11 16	庭
40	計量展覧会	1920.3.28 - 4.3	
41	第2回商品陳列会	1920.4.11 - 4.21	4.16から夜間開館
42	竹製品展覧会	1920.4.25 - 5.8	
43	⑨ 広島県美術及び美術工芸品展覧会	1920.5.1 - 5.15	3階
44	弟4回芸備図案会	1920.7.4	
45	ⅰ 生活改造博覧会	1920.7.15 - 7.25	学生の改造服陳列
46	弟5回芸備図案会(授賞式)	1920.9.19	
47	広島市工芸品品評会	1920.10.10 - 10.20	10.18褒賞授与式
48	広島県生産品展覧会（陳列館五周年記念）	1920.10.10 - 10.20	

＊「廣島から広島―ドームが見つめ続けた街展」図録（広島県立美術館、2010年）所収、菊楽忍編「広島県物産陳列館年表」から抽出

黒文字＝産業に直接かかわらない文化催事
白抜き丸アラビア数字：美術関連展覧会
白抜きローマ数字：国策展覧会

時代に開催された共進会、品評会、展覧会を抽出したものである。それによると同館開館の一九一五年八月一五日から改称前の一九二〇年一二月三一日までの五年三ヶ月あまりの間に、四八回この種の催しが開催された。つまり物産陳列館時代、年平均ほぼ九回の企画陳列が行われていたことになる。

このうち広島県美術展覧会など直接産業振興と関わりを持たない文化催事が九回、年平均にすると一・七回開催され、やはり産業振興と直接関わらない国策展（生活改造展覧会）が一回開催され、それらを差し引いた三八回が産業振興に関わる催事であったことになる。

こうした結果は、後述する改称後の事業内容（表3、4）と比較してはじめて、その特徴を指摘することができるが、この時点でいえることは、物産陳列館時代、同館は県産品による企画陳列を主とし、それに時折、全国学用品展覧会（表2四番目）、第3回国産巡回展覧会（表2一六番目）、全国特産品展覧会（表2一九番目）などを織り交ぜ、他府県の動向を示すことによって、県内商工業者や県民に対する啓発を心がけていたことがわかる。

そうした意味では、前節で取り上げた「全国玩具文具展覧会」（表2二三番目）同様、「全国林産工芸参考品展覧会」（表2二五番目）は業種として特化した全国展であり、しかもそれに続けて「広島県林産工芸参考品品評会」（表2二六番目）を開催することによって、この業種の啓発が計画的に行われていたことも浮き彫りになってくる。

さらには、表2一番に登場する「広告資料展覧会」をはじめ、「図案応用作品展覧会」（表2九番目）、「広告絵札展覧会」（表2一一番目）、「商品包装紙レッテル展覧会」（表2二八番目）など紙媒体に印刷する広告図案に関する展覧会を頻繁に開催していることが目を引く。

この期間、同館に対する国の介入は少なく、広島県は玩具、文具、木竹工業の育成を心がけていた。そして、他府

県や海外の貿易相手国に商品を売り込むため紙媒体の広告と包装紙などの改良開発に力を入れていた。こうしたことが、物産陳列館で開催された催し物によって浮き彫りになってくる。そうした意味においても、前節で触れた「似島獨逸俘虜製作品展覧会」（表2三〇番目）は、玩具先進国であり、ポスターなど広告デザインの分野でも蓄積と先進性を兼ね備えたドイツ人による展覧会として見本となった。また、半年後に開催された「商品陳列会」（表2三六番目）で「百貨店式に販売」が採用されたように、同展は来場者のみならず館員など主催者側にも影響を及ぼした展覧会であったことが伺える。

三　広島県商品陳列所の時代＝戦間期

三―一　改称後の催事の特徴――文化催事の増加と多様化

一九二一年（大正一〇）一月一日、広島県物産陳列館は広島県商品陳列所と改称される。前年四月二二日に農商務省から通達された省令第四号「道府県市立商品陳列所規定」にしたがった措置であった。先にも名を挙げた三宅拓也によれば、明治期から全国各地の中核都市で設立された物産陳列場もしくは商品陳列所の運営実態は、地域ごとの固有性に委ねられていた。しかし概ね、「国内的・地方的であり地方物産の陳列・販売を主とする」前者と「国際的であり、調査・研究的事業も行う」後者に大別できるものであった[35]。農商務省令「商品陳列所規定」の意図は、これらすべてを「貿易を主眼に置いた活動を中心に据える」[36]機関へと指導することにあった。そのため、職員の職制整備を行い、農商務大臣へ年度ごとの予算と業務成績の報告を義務づける。ひいては、一八九七年に設立された農商務

省商品陳列館を頂点とする陳列所の全国組織化をはかるための通達であった。

しかしながら、その試みは挫折する。関東大震災による農商務省商品陳列館焼失にともなう活動停止（一九二三年）、農商務省の商工省と農林省への分離解体（一九二五年）などがその要因とされている。名称だけは全国的に「商品陳列所」もしくは「商品陳列館」に統一されたものの、各地陳列所の質的状況は、「規定」制定前と大きく変わることはなかったという[37]。

この件に関し、広島における状況はどのようなものであったか。表2と同様の方法で抽出した表3―1と表3―2に掲げる広島県商品陳列所時代の催事一覧を表2と比較することによって、その実態が見えてくる。

まず、期間と事業頻度について、商品陳列所時代は一九二一年一月一日から一九三三年一〇月三一日までの一一年一〇ヶ月間で八六回の催事が開催された。平均すると年に約七回のペースで物産陳列館時代に較べ二回減っている。この間、文化に関わる展覧会は三九回、年平均にすると三・三回開催され、こちらは物産陳列館時代に較べ、ほぼ倍増している。また文化展は昭和（一九二六年）以降、目に見え頻度を増している。国策展には戦争や産業に関われるものが含まれるようになり全一二回、年一回を上回るペースで実施された。これは五年三ヶ月で一回のみの開催であった物産陳列館時代と較べ六倍に迫る頻度である。

産業、文化、国策と分けることができるこれら催事を個々に見ていくと、まず産業に関しては、物産陳列館時代には三八回のうち五回が「全国玩具文具展」など県産品を他府県品と比較する催しであった。それに対し、商品陳列所時代には三五回のうち一〇回が他府県品と比較する全国展である。つまり物産陳列館時代は県産品のみを紹介する機会が多かったのに対し、商品陳列所に改称後、国産品を広く紹介する陳列が頻度でいえば倍以上に増えた。とはい

え、それは「貿易を中心に据えた活動」ではない。また、時代が下がるほど後述するよう商工省の指導による国内産業を保護する展覧会も増えてくる。産業に関する催事に関し、総じていえば、商品陳列所時代は貿易に対し消極的であった。農商務省が改称通達に込めた思いを裏切る皮肉な結果となっている。

しかし、それにも増して商品陳列所時代で注目されるのは、文化に関わる催事の多さと多様性である。物産陳列館時代には、その大半が広島県美術展関連の催しにとどまっていたのに対し、商品陳列所時代には、写真、手工芸、書道等個別ジャンルに別れた展覧会が開かれる。また、その出品者も教員や広島美術院など職種や会派に属する者ごとに細分化されていく。一九〇二年（明治三五）に設置された広島高等師範学校は、一九二〇年（大正九）から生徒数を七〇〇名に増やし、それにともなう教員の増員を行っていた[38]。必然的に高等教育を受けた市内人口が増え、この街の市民の文化に対する価値観が多様化していく。文化に関する展覧会の多様化の理由は、その結果ともいえる。一九二九年（昭和四）の広島文理科大学の設立は、この流れを決定的なものにしたと思われる。

「ドイツ人制作肉筆ポスター展覧会」（一九二四年五月、表3一九番目）や「高級佛蘭西刺繍展覧会」（一九二六年八月、表3三五番目）など産業展に数えたもののなかには、欧州文化と深く関わるものも含まれている。また、国策展のなかにも「アメリカから来たお人形の展覧会」（一九二七年四月、表3三九番目）とその返礼展（一九二七年一〇月、表3四四番目）のように米国との友好関係を維持しようとしたものもあった。国家が貿易保護主義に向かうなか、同館は、少なくとも一九二七年までは欧米文化を積極的に紹介する姿勢を崩していなかった。

表 3-1　広島県商品陳列所で開催された共進会・品評会・展覧会（1921. 1. 1.-1927. 11. 7）

No.	催事名称	会期もしくは期日	備考
広島県商品陳列所と改称		1921.1.1	
1	図案展覧会	1921.3.1 - 3.15	3階
2	弟4回全国菓子飴大品評会	1921.4.1 - 4.19	
3	① 第6回広島県美術及美術工芸品展覧会	1921.5.1—5.15	
4 会	雨傘履物即売会	1921.6.1 - 6.10	
5	i 大戦ポスター展覧会	1921.8.26 - 8.29	欧州大戦時の英米独仏各国の戦時宣伝用ポスター
6	県下商品陳列会	1921.10.12—10.18	
7	売薬品評会	1921.11.15 - 11.20	
8	広島県水産品評会	1922.2.6 - 2.9	
	ii 平和博（東京）出陳品展示	1922.2.?	20日出陳品展示のため館長上京
9	② 第7回広島県美術及美術工芸品展覧会	1922.5.1 - 5.15	
10	全国代表工産物展覧会	1922.10.15 - 10.25	
11	消費経済展覧会　日用品大廉売会	1922.12.15 - 12.24	15日講習会、県商生徒による廉売会
12	工場能率増進展覧会	1923.1.13 - 1.18	
13	③ 第8回広島県美術工芸品展覧会	1923.5.1 - 5.15	
14	④ 中国四国写真展覧会	1923.5.22 - 5.27	3階、24日写真師総会
15	傘履物品評会	1923.6.1 - 6.10	
16	独逸品展覧会	1923.9.5 - 9.25	
17	優良品展覧会	1923.9.5 - 9.25	
18	⑤ 弟9回広島県美術展覧会	1924.5.1 - 5.15	
19	ドイツ人制作肉筆ポスター展覧会	1924.5.23 - 6.1	カルピス宣伝用
20	季節用品広告展覧会	1924.7.10 - 7.20	
21	弟1回園芸品評会	1925.3.25 - 3.27	27日褒章授与、広島市農会主催
22	iii 第2回国産品愛用巡回展覧会	1925.4.15 - 4.17	
23	⑥ 広島県美術展覧会	1925.5.1 - 5.15	
24	佛国壁紙展覧会	1925.5.24 - 5.30	
25	家庭手芸品展覧会	1925.7.31 - 8.2	
26	玩具展覧会	1925.7.6—7.26	
27	第1回中国金魚展覧会（品評会）	1925.9.12 - 9.13	
28	iv 学校衛生及結核予防展覧会	1925.10.24 - 10.26	
29	v 口腔衛生展覧会・口腔衛生講習会	1925.10.24 - 10.26	
30	⑦ 第1回美術作品展覧会	1926.2.22 - 2.26	
31	綿織物展覧会	1926.2.25 - 2.27	
32	台覧品一般観覧	1926.4.26 - 4.30	
33	⑧ 第11回広島県美術展覧会	1926.6.16 - 6.30	附設中等学校作品展覧会
34	⑨ 第3回朝顔竝輪会	1926.8.1	
35	高級仏蘭西刺繍展覧会	1926.8.25 - 8.27	26日講習会
36	木履品評会	1926.9.23 - 9.30	30日褒章授与式
37	⑩ 第1回美術展覧会	1926.10.22 - 11.2	ガンス社主催
38	⑪ 第1回広島美術院展覧会	1926.11.5 - 11.11	
39	vi アメリカから来たお人形展覧会	1927.4.20 - 4.27	
40	⑫ 広島県美術展覧会	1927.5.1 - 5.？	
41	⑬ 古代工芸品陳列会	1927.6.12 - 6.16	
42	特許新案品展覧会	1927.6.18- 7.31	
43	⑭ 教員作品展	1927.9.21 -9.25	
44	vii アメリカにお使いする本県お人形観覧	1927.10.6 - 10.18	
45	広島特産品評会	1927.10.15 - 10.？	23日授与式
46	⑮ 第2回広島美術院展覧会	1927.11.1 - 11.7	3階

表 3-2　広島県商品陳列所で開催された共進会・品評会・展覧会（1928. 2. 1.-1933. 10. 31）

No.	催事名称	会期もしくは期日	備考
47	⑯ 児童生活展覧会	1928.2.1 - 2.?	
48	⑰ 県下児童の絵画手工展	1928.2.25 - 2.28	
49	⑱ 広島県美術展覧会	1928.5.1 - 5. ?	
50	⑲ 昭和博の宣伝ポスター展	1928.9.5 - 9.9	懸賞募集して入選した宣伝ポスターの人気投票実施
51	⑳ 第3回教員作品展	1928.9.16 - 9.30	
52	㉑ 第3回広島美術院展覧会	1928.10.31 - 11. ?	
53	㉒ 昭和美術展覧会	1929.4.25 - 5.14	昭和博覧会協賛
54	㉓ 図画手工教員作品展	1929.9.22 - 9.26	
55	㉔ 第4回広島美術院展覧会	1929.11.1 - 11.7	
56	林産品評会	1929.11.20 - 11.26	
57	viii 第13回国産品愛用展覧会	1929.11.29 - 12.1	
58	㉕ 県下小学児童手工展覧会	1930.1.22 - 1.26	
59	ix 合理化展覧会	1930.5.1 - 5.7	広島県能率研究会主催
60	㉖ 弟15回広島県美術展	1930.5.10 - 5.?	
61	行啓五周年記念産業展	1930.5.25 - 6.8	
62	x 輸入品国産品対比展覧会	1930.10.1 - 10.7	
63	商業美術展覧会	1930.10.1 - 10.10	
64	㉗ 広島美術院展覧会五周年記念展	1930.11.10 - 11.17	
65	輸出手芸品展覧会	19301.3.17 - 3.23	
66	全国発明展	1931.4.18 - 4.28	
67	㉘ 広島県美術展覧会	1931.5.1 - 5.?	4.30内覧会
68	㉙ 書道展覧会	1931.5.2 - 5.4	第二会場:広島商工会議所
69	科学工業品製造工程展	1931.5.25 - 6.8	
70	xi 輸入品国産品対比展覧会	1931.9.11 - 9.20	
71	㉚ 弟6回広島美術院展覧会	1931.11.1 - 11.7	
72	㉛ 第1回広島県下工芸品展覧会	1931.11.20 - 11.27	
73	㉜ 第1回広美展	1932.2.9 - ?	
74	㉝ 広島県美術展覧会	1932.4.15 - 4.25	
75	勅諭拝受五拾年記念時局博覧会	1932.4.29 - 5.15	
76	㉞ 郵便と蒐集趣味の展覧会	1932.6.5 - 6.7	
77	㉟ 河面冬山蒔絵作品展	1932.6.5 - 6.7	
78	㊱ 広島県教員作品展覧会	1932.9.22 - 9.26	
79	商業美術展	193210.9 - ?	
80	第1回全国広告展覧会	1932.11.3 - 11.19	3階
81	第2回全国発明展覧会	1933.2.25 - 3.8	
82	全国名産品展覧会	1933.4.8 - 4.14	
83	xii 家庭生活合理化展覧会	1933.4.22 - 4.28	
84	㊲ 第18回広島県美術展覧会	1933.5.1 - 5.10	
85	㊳ 第1回高山植物ならびに山草展覧会	1933.5.13 - 5.14	
86	㊴ 第7回教員作品展	1933.9.22 - 9.26	
広島県商品陳列所業務終了		1933.10.31	

＊「廣島から広島―ドームが見つめ続けた街展」図録（広島県立美術館、2010年）所収、菊楽忍編「広島県物産陳列館年表」から抽出

黒文字＝産業に直接かかわらない文化催事

白抜き丸アラビア数字:美術関連展覧会

白抜きローマ数字:国策展覧会

三―二　主催者と受容者の意識の乖離――第四回全国菓子飴大品評会

前節で述べたように農商務省の通達により名称変更をした広島県商品陳列所は、一九二〇年代後半から商工省の指導にしたがい催事を内向化させていく。しかし、そうした兆しを示した催事が、早くも改称から三ヶ月後に開催されている。一九二一年四月一日から四月一五日まで開かれた「第四回全国菓子飴大品評会」（表3二番目）がそれである。前章二節で触れた玩具文具展は、「全国」と謳いながらも出品地域は三府一二県にとどまり、来場者も県民のみを想定した広島県の主催事業であった。それに対し、この会は業界主催で、出品者には北海道から台湾、朝鮮、満州の業者も含まれていた。また、広島駅と己斐駅に歓迎アーチを設けるなど他府県からの来場者を見込む催事であった。さらに、会場も三階のみの使用であった玩具文具展に対し、この度は、二、三階両階を使用した大規模な陳列が行われた。

しかしながら、規模の大きさや歓迎ムードの華やかさとは裏腹に、この催事に対する評価は芳しいものではなかった。『中国新聞』が四回にわたって連載した「菓子飴品評会瞥見記」は、「会場全体が、桜と藤で飾ったのがまずけばけばしい……並べられたせっかくの菓子が映えない目立たない」（図17、18）と評している。先に挙げた玩具文具展に寄せた好意的な記事とは対照的である。

そうしたなか、「瞥見記」の記者は個々の店舗装飾や包装デザインに寸評を加えながら、「ぴか一は、ココアを無料配布したからではないが、森永製菓の出店レイアウトが最高だった」[39]としている。一八九九年（明治三四）の創業後、ミルクキャラメルの販売とエンゼルマークの商標登録で成功を収めた森永製菓は、輸出専用ビスケットの生産や輸入した原料カカオ豆から国内初のチョコレート製造を実現するなど、加工貿易で利益をあげる菓子業界のトップ企

業に成長していた。一九一九年（大正八）八月にはミルクココアの発売を開始し、一九二〇年（大正九）三月の福岡工業博覧会では「森永ココアホール」と名付けた売店を特設して好評を博していた[40]。その余勢を駆って広島の品評会会場では五万杯のココアの無料配布を行い、注目を集める。

しかし、広島で開催された菓子飴品評会が名誉賞金牌を授けたのは尾道芳選堂カステーラと広島製飴会社の澱粉飴であった[41]。これは主催者による、「地方物産の陳列・販売」を推進する「物産陳列場」的裁定に他ならない。森永製菓のように「国際的であり、調査・研究的事業も行う」「商品陳列所」的企業の商品は評価されなかった。

本展の三ヶ月前に広島県物産陳列館の名称は、貿易重視を意味する「商品陳列所」に変わっていた。また広島市民は二年前の獨逸俘虜技術工芸品展で、ドイツの味と文化に親しみを覚えていた。そうした彼らにとって、洗練された店舗や包装、また国際的な商品を支持することは自然の流れであったはずである。にもかかわらず、主催者など資本

図 17　第四回全国菓子飴大品評会（1921 年 4 月）陳列風景

図 18　第四回全国菓子飴大品評会（1921 年 4 月）陳列風景

家は、本展で旧態依然とした過剰装飾の陳列を行い、地産商品への執着を示す。こうした意味で、広島における「菓子飴品評会」の開催は、消費者と資本家両者の商品に対する意識の乖離を鮮明にした催しであったといえる。物産陳列館が建設される前やその名があった時代は、官僚や資本家が主導して貿易と海外との交流を推し進めようとした。それに対し、商品陳列所に名前が変わってから、その点に関して消費者の方が貪欲さ示すようになる。一九二一年春の菓子飴品評会は、欧米志向に関する資本家と公衆の逆転現象を顕著にした最初の事例であったともいえる。

三―三　商品陳列の終焉――「昭和産業博覧会」不参加と「産業合理化」「国産品愛用」推奨

第一次大戦終結後、欧州の経済活動復帰とそれに前後した関東大震災（一九二三年九月一日）により日本経済は低迷する。広島においてもこの時期、長引く不況を打開する策を講じる声が高まり、一九二五年（大正一四）に広島市と広島商業会議所は、別個に博覧会を開催する構想を打ち出した。しかし、いずれの案も大正天皇逝去を理由に計画は中断され、一九二八年（昭和三）に後者が広島商工会議所に改名後、ようやく両者の考えが一つにまとまった。計画実行は一九二九年（昭和四）になってからとなる(42)。「昭和産業博覧会」（同年三月二〇日から五月一三日）と銘打たれたその催事の会場は、西練兵場と比治山公園と元宇品の三箇所であった。商品陳列所は、同時期に「昭和美術展覧会」（一九二九年四月、表3五三番目）を開催するにとどまる。市の主催事業であるため県立の施設が会場に選ばれなかったのは無理からぬところがあるが、結果的に一二六万人に迫る来場者を得る催事で同館に「商品」が陳列されず、代わりに「美術」がならべられたという事実は、館の性質がその後変わってゆくことを示す象徴的な出来事であった。開館から一四年目を迎えようとしていた同館は古く手狭で、新時代＝「昭和」の産業を披露する場として、

最早そぐわなくなくなっていた。さらにいえば、昭和博から半年後の同年一〇月一日には広島初の百貨店福屋が開業する。これにより「商品」は、最早陳列されるものではなく、手に入れる対象となっていく。

福屋開業から七ヶ月後に商品陳列所は「合理化展覧会」（一九三〇年五月、表3五九番目）を開催する(43)。資本主義諸国の第一次大戦後の経済対策として産業合理化が叫ばれるなか、日本政府におけるそれは、一九二九年（昭和四）九月に俵孫一商工大臣が「企業経営ヲ合理化シ投下資本ノ増進ヲセシムル」具体策を商業審議会に諮問したことで本格化する(44)。政府はその後、操業短縮を呼びかけ、生産・販売に統制を敷き、中小工業の組合活動を制限することになる。それに先立ち日本能率連合会がこの運動をすでに推進しており、広島においては内務省の意向を受け、一九二八年（昭和三）に県が広島能率研究所を設立していた。「合理化展」は、同会が第三回全国大会を広島で開催するのに合わせ、会期を一九三〇年（昭和五）五月としたものである。景気回復策として、広島市が「昭和産業博覧会」で需要拡大を目論んでいた時期、また市井では百貨店が開業され供給が満たされていく時期に、広島県は国の指導のもと、合理化による生産性の向上を呼びかけていたのである。

さらに商品陳列所は、同年（昭和五）一〇月と翌年九月の二年連続で「輸入品国産品対比展覧会」（表3六二番目と七〇番目）を開催する。同展は産業合理化運動と一体となって推進された国産品愛用と輸入品排斥を推進する運動の一環として催されたものであった。

広島における二度目の「輸入品国産品対比展」会期中の一九三一年（昭和六）九月一八日、満州事変が勃発する。これを受け、広島商工会議所は事変後一〇日目にあたる九月二八日に「決議文」を採択し、軍の行動を「正当防衛ノ応急的手段」と擁護して、それを支持する表明をした(45)。

翌年（昭和七）三月一日の満州国建国に即応して、同年四月一日、広島県商品陳列所は奉天に事務所を開設する[46]。満州事変は、奉天市郊外柳条湖岸の鉄道爆破を発端とするもので、同市にはいち早く関東軍が駐留し臨時政府を打ち立てていた。

さらに、広島商工会議所は同年同月二七日から「勅諭拝受五拾年記念時局博覧会」（表3七五番目）を主催する。ここでいう「勅諭」とは、一八八二年（明治一五）一月四日に明治天皇が陸海軍に下賜した「軍人勅諭」を意味する。同博覧会は、西練兵場を第一会場、商品陳列所を第二会場とする第五師団司令部ならびに呉鎮守府など軍部との共催事業であった。第一会場には「勅諭記念館」、「時局館」など設けられ、明治以来の中国侵略の正当性と満州事変以降の戦局の進展が喧伝された。商品陳列所は、この折「満蒙館」（図19）と命名され、彼の地の気候、風土や住民の生活様式から経済や産業の状況などが実物、模型、パノラマ等を用いて紹介された。来場者は四〇万人におよぶ[47]。図版でも認められるように、陳列室の窓は、物産陳列館時代のそれ（図12、18）とうってかわってカーテンで覆われている。したがって建物に入る人並みは確認できても、そこで何が営まれているか、外からはわからない。ショウケースに喩えることができた物産陳列館に対し、商品陳列所は、時代が下がるに連れて暗さを増すブラックボックスに擬えることができる。

図19　勅諭拝受五拾年記念時局博覧会において「満蒙館」となった広島県商品陳列所

同博覧会は公的には、「我国民経済の生命線たる満蒙の実情と時局に対する一般の認識並に軍事智識の向上普及を計」ることが目的とされていた。しかし、商工会議所が同会を主催した狙いは、「事件終了後平和の経済的活動に於ても亦全国に魁して、彼地に進出し産業及貿易の振興に貢献し都市の興隆、国運の進展に貢献する」（「時局展覧会の翼賛」『広島商工会議所月報』第二二巻、第三号、昭和七年三月）ところにあった[48]。ことここにおよんで、広島の資本家たちは、かつて早速整爾や『物産陳列館報告』が志した貿易振興とはまるきり異なる途を選んだことになる。かつて早速や『報告』は、商品の品質向上と価格競争に勝ち抜くことで貿易振興を図ろうとした。それに対し、満州事変後の商工会議所は、軍の侵略地に向けた販路拡大と同地からの安価な原材料の輸入に活路を見出そうとしている。彼らの思いは軍の思惑と一体化する。その結果、商品陳列所に課せられた使命は、侵略先の情報収集と取引斡旋に特化してゆくことになる。

四　広島県産業奨励館の時代＝十五年戦争期

四―一　県産品の販路開拓―中国大陸の日本人に向けて

一九三三年（昭和八）一一月一日、広島県は商品陳列所を産業奨励館に改称すると告示する[49]。理由は、「時勢の進展といふか坐して商ふは甚だしく能率を低下するによって、従来の商品を陳列するといふ域から飛躍して、県産品の海外進出を目論」[50]むためであった。この趣旨にしたがい、一九三四年（昭和九）四月一日、同館は大連、新京、哈爾濱に事務所を開設する[51]。前節で述べた奉天事務所に継ぐ措置であった。大連は日露戦争後のポーツマス条約に

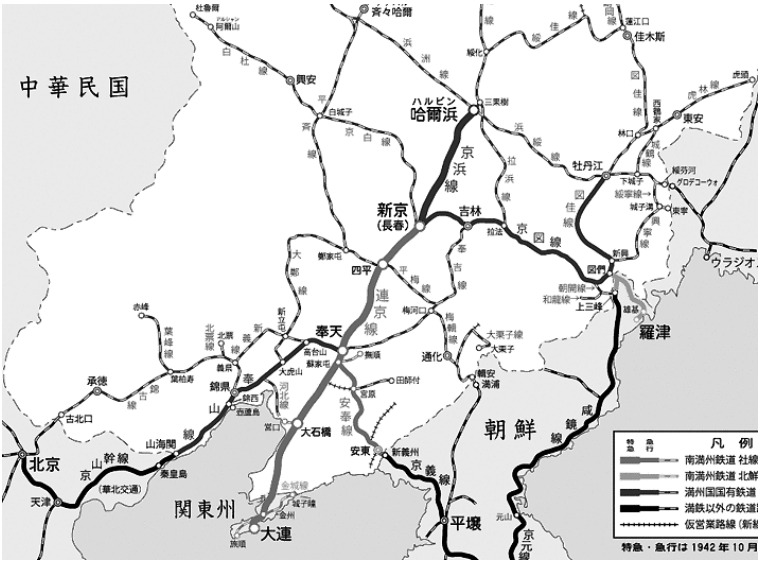

図 20　関東州・満州国の鉄道路線図

基づき、一九〇五年（明治三八）以降、ロシアから日本に租借権が移った街であった。同市と遼東半島の先端にある旅順、ならびに南満州鉄道の付属地からなる租借地は「関東州」と名付けられ、満州国とは別に大日本帝国が直接統治していた。新京は、満州国建国に際し、首都に定められた長春が一九三二年三月一四日をもって改称させられた街である。首都としての都市計画が次々と持ち込まれ、満州国のなかで人口流入が最も激しかった街でもあった。哈爾濱は一八九八年（明治三一）にシベリア鉄道の延長として東清鉄道建設が着手されて以来、ロシア人により開発された街で、交通の要地として急速な発展を遂げ、満州国成立の頃には、同国で奉天に次ぐ大都市になっていた。これらの都市の位置は地図（図20）に示すとおりである。要するに、満州国建国からほぼ一年で、広島県産業奨励館は関東州（大連）と満州国（奉天、新京、哈爾濱）の主要四都市に事務所を構えたことになる。その狙いはどこにあったのか。同館が一九三七年（昭和一二）に発行した『本県本邦

海外貿易総計資料彙集』から、それを読み取ることができる。

同書によれば、輸出額に関し、一九三一年（昭和六）を一〇〇とした指数で、一九三六年（昭和一一）の本邦（日本全国）二三五に対し、本県（広島県）六〇九を記録した[52]。輸入額は同年対比で本邦一二四、本県一〇九となっている。すなわち、満州事変後の五年間で、日本全体の輸出入額はほぼ倍増したのに対し、広島県の輸入額はほぼ変わらず、輸出額のみが六倍になっている。そしてその広島県の輸出先は関東州五七・〇％、満州国二六・五％、それに北支六・一％となっていた[53]。三者合わせて八九・六％となる。つまり、六倍に跳ね上がった広島県の輸出の相手先の九割が中国大陸の日本軍が侵略した地域であった。

さらに同書で、広島県の輸出品の細目を見てゆくと、一九三六年（昭和一一）実績で、畳表が全額の一九・三％、缶詰一三・三％、清酒九・〇％、縫針四・六％と続いている[54]。つまり、広島からの輸出品の大半が、缶詰以外は幕政以来の伝統産業による商品であった。これは、満州事変以降、広島からの輸出が飛躍的に増大したが、その取引相手は外国人ではなく、満州と関東州に出征した兵士と移民を対象としていたことを物語る。そしてそれは、満州事変により広島では伝統産業による商工業者が息を吹き替えし、産業の近代化を目指した新興資本家の発言力が弱まったことを意味している。

産業奨励館は、この『彙集』を発行した同年、『産業の広島県』と題した一般読者向け小冊子も発行している。そこでは、第二章に「広島県の物産」という項目があり、「主要物産概要」として、清酒、醤油、清酢、缶詰、削鰹、味噌の順に県産品を紹介している。つまりこの時点で、産業奨励館は伝統産業による商品をさらに県外にアピールしようとしていた。

また同冊子には、「広島県産業奨励館海外出張員」名簿が掲載されていて、一九三七年（昭和一二）一月二〇日の時点で配置されていた事務所の住所と職員の名がわかる。そしてそこに、先に挙げた四都市（奉天、大連、新京、哈爾濱）以外に上海事務所が記されている[55]。さらに興味深いのは、巻末に掲載された「業務要項」である。そこには以下のように記されている。1　県物産ノ販路開拓、2　海外貿易ノ斡旋、3　商品改善ノ指導、4　商工ニ関スル調査、5　県物産ノ陳列即売、6　商品見本ノ陳列貸与、7　図案ノ調整指導、8　産業貿易ノ図書閲覧、9　産業貿易ノ刊行物発行、10　其ノ他産業ノ助成。

広島県物産陳列館が開館一年目に発行した『報告』に掲載された「業務要項」（図13）と較べると、「陳列」が下位（五番目と六番目）に下がり、そこには掲載されていなかった「販路開拓」が一番の最重要事項とされている。つまり同じ建物を使用し、同じ産業振興という目標を掲げながら、物産陳列館と産業奨励館では、そのための手段（業務）が、如実に変わってしまった。

一九三七年（昭和一二）七月七日に北京近郊で発生した日本軍と中国国民革命軍の衝突（盧溝橋事件）とその後の日本軍の展開に即応するように、産業奨励館は一九三八年（昭和一三）四月二七日、北京に近い天津に事務所を開設した[56]。同年一二月発行の同館報告書では、一九三七年（昭和一二）の広島県の輸出額は、一九三一年（昭和六）の一〇〇に対し、九三三にまで伸びている[57]。産業奨励館が最重要視した「販路開拓」とは、まさにこういうことであった。満州事変以降、広島県産業の発展は大陸に展開する日本軍の進行に完全に依存していた。産業奨励館が中国大陸各地に事務所を構えたのは、そこに駐留もしくは移住した日本人に対し、畳表や清酒、そして日本人の食習慣に合う缶詰を差配するためであった。

四―二　産業奨励館の美術館化と美術家の戦争協力

表4に掲げるのは、基本的に表2と同様の方法で抽出した広島県産業奨励館時代の催事一覧である[58]。一九三三年（昭和八）一一月から四四年（昭和一九）三月までの一〇年四ヶ月の間に三六回の催し物が開かれ、そのうち文化に関わる展覧会が一八回、国策展が一〇回あった。催事全体の頻度が商品陳列所時代の半分以下に減っことに加え、同館の本来業務であるはずの県産品や参考品を陳列した催事は八回、つまり全体の四分の一に過ぎない。その事実だけでも二度目の改名後、同館が陳列所として機能しなくなったことは明らかであるが、さらにいえば、一九三八年（昭和一三、表4二五番目）以降、つまり天津事務所開設以降、同館は商品陳列を一切していない。中国大陸六都市に「販路開拓」完了後、皮肉な言い方をすれば、同館は当初の目標どおり「商品を陳列するといふ域から飛躍」したことになる。

この間、商品陳列に代わり同館が行った事業は美術展であった。文化に関わる催事一八回は工芸展を含めるとすべて美術展である。それに国策展として数えた聖戦美術展等六回を加えると、産業奨励館時代の催事の三分の二が美術展であったことになる。極端にいえば、同館は産業奨励館に改名後、実質上、美術館となった。その理由は、一九二六年（昭和元）から三六年（昭和一一）にかけて東京、京都、大阪の三都市に公立美術館が設置され、広島のような地方中核都市にも匹敵する施設が望まれたという流れがあった。さらに大きな視点に立てば、「昭和に入る頃から多様化しはじめた教育機関やジャーナリズムに後押しされるかたちで美術の大衆化が急速に進んだのが、この一九三〇年代だった。美術家人口の急増を受けて官展や在野の公募美術団体の展覧会はどこも活況を呈した」[59]という時代背景があった。

表4　広島県産業奨励館で開催された共進会・品評会・展覧会（1933. 11. 1.-1944. 3. 31）

No.	催事名称	会期もしくは期日	備考
広島県産業奨励館に改称		1933.11.1	
1	① 日本画展覧会	1933.12.2 - 12.8	芸柱社主催
2	② 広島県美展	1934.4.28 - 5.7	20周年
3	葉煙草品評会	1934.9.27 - 10.1	
4	i 航空博覧会（第一会場）	1934.11.1－11.7	第二会場：福屋
5	全国発明展	1934.11.10 - 11.21	
6	③ 第1回広陵院展覧会	1935.3.? - 3.15	
7	④ 広島県美展	1935.4.28 - 5.7	第21回
8	ii 中南米展	1935.5.24 - 6.6	ホール
9	⑤ 陶器展覧会	1935.5.24 - 5.30	
10	⑥ 弟4回広島洋画展	1953.9.18 - 9.24	
11	iii 第6回産業福利展覧会	1935.10.9 - 10.15	
12	一府六県林産共進会	1935.10.22 - 10.25	
13	⑦ 弟5回広島県工芸展覧会	1935.11.1 - 11.5	
14	弟10回輸出品包装展覧会	1935.11.11 - 11.25	3階
15	表彰発明展覧会	1935.11.22 - 11.28	ホール
16	県下新興産業展覧会	1936.5.21 - 5.30	
17	⑧ 石鹸素地彫刻展覧会	1936.6.6 - 6.12	
18	⑨ 芸州美術協会第1回展	1936.11.22 - ?	
19	特選発明展	1937.1.22 - 1.31	
20	⑩ 広島県美展	1937.5.1 - 5.10	第23回
21	⑪ 芸州美術協会傷病将兵士慰問献画展	1937.5.23 - 5.24.	『実現』の記述による
22	⑫ 第1回みづえ展	1937.6.23 - 6.29	
23	⑬ 中四九県産業工芸展覧会	1937.9.14 - 9.20	
24	広島県都市園芸品評会（第一会場）	1937.11.6 - 11.8	
25	⑭ 広島県美展	1938.5.2 - 5.?	第24回
26	⑮ 広島県小学校教員図画展	1938.9.14 - 9.18	
27	⑯ 第7回広島県工芸展	1938.11.1 - 11.?	
28	⑰ 広島県美展（第1会場）	1940.4.28 - 5.7	第二回場：日本赤十字社広島支部講堂
29	iv 聖戦美術展覧会	1940.10.23 - 11.7	
30	v 広島県科学展覧会	1940.11.13 - 11.17	
31	vi 全日本児童興亜作品展覧会	1941.10.7 - 10.12	
32	vii 聖戦美術傑作展	1942.3.8 - 3.22	
33	⑱ 広島県美展	1943.5.1 - 5.10	第29回
34	viii 軍艦献納画展覧会	1943.5.27 - 5.30	
35	ix 小国民創案手工品展覧会	1943.11.22 - ?	
36	x 大東亜聖戦美術傑作展	1943.12.8 - 12.16	
産業奨励館業務終了		1944.3.31	

＊「廣島から広島―ドームが見つめ続けた街展」図録（広島県立美術館、2010年）所収、菊楽忍編「広島県物産陳列館年表」から抽出

黒文字＝産業に直接かかわらない文化催事
白抜き丸アラビア数字：美術関連展覧会
白抜きローマ数字：国策展覧会
白抜きローマ数字：国策展の内美術関連展覧会

産業奨励館で美術展を主催する団体の多様さも、盧溝橋事件が起きる一九三七年（昭和一二）までは保たれていた。例えばそこには「芸州美術協会展」（一九三六年一一月、表４一八番目）のように当地で異彩を放った美術団体の展覧会も含まれている。広島における戦前戦後の美術運動史を資料から掘り起こした金田晋によれば、「芸州美術協会」とは、広島市内で佐伯便利堂という文具店を営んでいた佐伯卓造の出資によりできた美術団体である。佐伯は『実現』という文化雑誌を毎月刊行する出版社を広島市内で興し、戦後は朝日広告社という広告代理店を立ち上げた人物でもあった。「芸州美術協会」の同人には靉光、船田玉樹、丸木位里らがいた[60]。靉光、本名石村日郎は広島県山縣郡壬生に生まれ、大阪の天彩画塾、東京谷中の太平洋画会研究所に学ぶ。一九三〇年頃には前衛的画風によって二科展や独立展など中央画壇でも注目を集める画家になっていた。産業奨励館で「芸州美術協会展」が開催された一九三六年（昭和一一）には独立展に《ライオン》を出品している。同作のモチーフは、後の彼のシュルレアリスム的代表作《眼のある風景》（一九三八年）へと結実していった[61]。船田玉樹は、広島県立一中を卒業後、画家を志し、小林古径や速水御舟の薫陶を受け、早くから院展で頭角を現していた。《原爆の図》で後に知られる丸木位里は日本南画院や青龍社に参加して、旺盛な作家活動を展開していた。日本画の船田と丸木は一九三八年（昭和一三）に東京で歴程美術協会第一回展に出品している。同協会の参加者は、抽象的に描くことも厭わない日本画の新機軸を開こうとしていた。こうした前衛的で全国的にも認知され、美術史上後に名を残す若い画家たちの新作が産業奨励館の壁を飾っていたのである。

ところが、彼らが第一回展を開いた一一ヶ月後の産業奨励館の催事を見ると、そこに「芸州美術協会傷病将兵士慰問献画展」（一九三七年五月、表４二一番目）が開催されていたことが確認できる。同展は、その名のとおり傷痍軍

人を慰労するために開催されたもので、展覧会終了後、同展出品作のうち靉光の《銅像》や《池の端》等協会同人作品二〇点が広島陸軍病院へ、同様に一〇点が海軍病院に献納された[62]。同展に《頂上》というタイトルの作品を出品した丸木は当時の作風を以下のように評されていた。「丸木位里氏は屈託の無い墨技でぽんぽん書き飛ばしてある。筆自ら楽んで紙面を弄ぶといつた態。線と云はうか線の拡がりと言はうか、何れの條幅にも筆端の躍る自由な画境がある」[63]。「芸州美術協会」の同人たちにとって、自らの作風が前衛的であることと、その作品が軍国日本に奉仕することの間に矛盾はなかった。というのも同協会主宰の佐伯は先に挙げた月刊誌『実現』のなかで、次のように述べているからである。

> 軍閥総動員の今日の抗日支那が、日本の武力に依て粉砕されつつあるのは支那に取って偉大なる黎明来たると見るべきだ。黙々として居ても、天は実に時代推進の偉大なるハンドルを握って居る。[64]

つまり、「芸州美術協会」の主宰者は、抗日支那を粉砕することが「支那に取って偉大なる黎明」と信じていた。したがって、その同人の作風が前衛的であることは、「黎明」を意味する歓迎すべきことであり、そうした彼らの作品が傷病将兵士のため「慰問献画」されることは、あるべき姿であったのである。

四―三　最後の展覧会と産業奨励館の終焉

一九四〇年（昭和一五）一〇月には産業奨励館で「聖戦美術展覧会」が開催された。「聖戦美術展」とは、一九三

九年（昭和一四）七月六日、「支那事変勃発二週年（ママ）を記念し、国民精神の昂揚を図り、軍国美術の奨励を資する目的の下に東京朝日新聞社が陸軍美術協会と共同主催」[65]した展覧会である。同展は東京府美術館を皮切りに、満州国と日本各地を巡回[66]。産業奨励館で一九四〇年（昭和一五）一〇月に開催された「聖戦美術展覧会」（表4二九番目）はこれにあたる。出品内容は、絵画と彫塑の二部にわかれ、会員作、招待作家作、公募入選作の三種から構成されていた。同展に合わせ朝日新聞社が刊行した『聖戦美術展集』には三二一点のモノクロ図版が掲載されている[67]。出品作の主題は、概ね以下のように定められていた。（イ）支那事変における皇軍部隊の活動及び戦闘情景、（ロ）右に付随する各班の活動状態（中略）、（ハ）支那事変皇軍占拠地の状況（中略）、（ニ）銃後国民活躍の情景、（ホ）皇軍将兵の姿態、各種兵器艦船等である[68]。藤島武二を長とする審査員には、石井柏亭、橋本関雪、川端龍子、小磯良平ら一四名が名を連ねていた。興味深いのは、「聖戦美術」と銘打たれたわりに、あるいはむしろそれ故に、同展の出品作には凄惨な戦闘場面を扱った作品がなかったことである。美術史家の児島喜久雄はその点について「血腥い光景が一つもないのは故意に避けたものであらうか。既に聖戦とあるからには皇軍が血みどろになって闘って居る光景も当然あつて然るべきである」[69]と不満を述べている。審査員の作品には、出品規定の（ハ）の条件を満たす「支那風物」を描いた作品も多く、審査員ではないが北川民次のように、（ニ）の条件を満たしながら、画家本来の持ち味を日常的なモチーフに活かす作品も本展には多数出品されていた。

第二回「聖戦美術展」も同じ主催者、同様趣旨のもと、同会場で一年後に東京展が開かれた[70]。その出品作より約一二〇点を選抜して広島に巡回した展覧会が「聖戦美術傑作展」（一九四二年三月、表4三二番目）である。本展においても審査員長を務めた藤島武二は、上海の川畔をモチーフに平時の風景画のような作品を出品している。ただ、

この回から審査員に加わった藤田嗣治が《哈爾哈河畔之戦闘》を描いたように、職業画家が軍の委嘱によって重要な戦闘場面を題材にした「作戦記録画」が多数を占めるようになる。藤田の当該作品は、日本とソビエトが交戦したノモンハンにおいて、日本が大敗を喫したにもかかわらず、あたかも日本軍がソ連軍を制圧したかのように演出作画した作品であった。

「大東亜戦争聖戦美術傑作展」（表4三六番目）が初日を迎えたのは一九四三年（昭和一八）一二月八日、つまり今次戦争の開戦記念日であった。同展は朝日新聞社が絡まぬ陸軍美術協会主催による展覧会で、陸軍が職業画家に委嘱した作品のみで構成された。出品作の詳細は不明であるが、展覧会初日前日の内覧会の模様を伝えた以下の様な記事がある。

> 大東亜戦争記念日のけふ八日意義深く監明けした陸軍美術協会、本社主催の聖戦美術傑作展は開会と同時にまづ大手町国民校児童約五百名を先陣に竹屋、観音、千田、済美、光道各国民校、祇園実践女学校などおよそ五千名が会場県産業奨励館を埋めつくした。学童たちは画布に記録された壮絶極まる皇軍将兵の血闘や戦ふ落下傘部隊の奮戦ぶりに感興の目をみはり感激と昂奮に〝僕たちもやるぞ！〟の決意を眉宇に会場を出ていく、（中略）かくして第一日の決戦美術の展覧は一万余の人、人に山に沸騰した。(71)

ここで語られている「壮絶極まる皇軍将兵の血闘」を描いた絵は、誰のどの作品を指しているかはわからない。ただ、同年九月の「国民総力決戦美術展」に藤田嗣治が《アッツ島玉砕》を出品して以来、日本兵の凄惨な大量死を主

題とする絵はタブーではなくなっていた。そうした時期の展覧会である。そして《アッツ島玉砕》に関していえば、それは「あたかも遺影や宗教画の殉教図のように拝まれていた」[72]。この時期、この種の展覧会で観衆は、「感興の目をみはり感激と昂奮」を覚え、出品された作品は鑑賞ではなく拝む対象となっていたのである。それが同館開催最後の展覧会となった。

同展から四ヶ月後の一九四四年（昭和一九）三月三一日、広島県産業奨励館は県の告示二六五号により業務廃止となる。それにともないこの建物は、内務省中四国土木出張所ならびに広島県地方木材株式会社等が使用する事務所となる[73]。土木・材木関連の事務所がここを使用するのはそれなりの理由があった。一九三二年（昭和七）一二月一三日、宇品港は広島港と改称され翌年から修築工事に入る。当初は商業港としての拡張のみを計画していたが、一九三九年（昭和一四）から新たに工業港も隣接させる案が持ち上がり、それにともない両港の間にあたる元安川と京橋川の合流点付近に貯木場をつくる計画がたてられたからである[74]。元安川に正面を向けて建てられたこの建物は、そこへのアクセスに都合が良い場所となっていた。設置者の寺田祐之と設計者のヤン・レツルの意向で「眺望」という観点から元安川側を正面とされたこの建物は、その役目を終えた後は、川に面する「利便性」によってその使い道が決められた。かくして、官公庁の関連事務所に通う限られた人だけが出入りする状況の下、県の産業振興機関としての機能をかろうじて保っていたこの建物は被爆し、施設としての役割も完全に喪失することとなる。

おわりに

以上述べてきたとおり、広島県の産業振興を使命とした施設は、時代とともにその業務内容を変えてきた。建物を器、業務をその中身に喩えるならば、時代ごとに中身を入れ替えてきたといえるかもしれない。しかしながら、過去にあった出来事は、遠のいていくにせよ、人の記憶に残る以上、地域住民の頭のなかに思い描かれる中身は、入れ替えられたというよりも、層をなして積もっていったという方が的確であるだろう。さらに比喩を重ねるならば、産業振興に対し、リベラルで外向的な志向を水捌けが良く流動的な「砂」、保守的で内向的な志向を水捌けが悪く溜まりがちな「泥」に喩えると、「貿易産業ヲ発展セシムル最良手段」として発議され、都市中間層の憩いの場として設計されたこの建物は、そもそも「砂」でできた器であった。開館当初、玩具製造とインド貿易に活路を見出そうとし、ドイツ兵捕虜による展覧会を開いた頃までは、海外に向けた館の積極的姿勢とそれを支える周囲の海外に対する友好的雰囲気があった。つまり、砂の器に最初に盛られたものは「砂」であり、器の外もやはり「砂」で覆われていた。

ところが、第一次世界大戦終結後、都市中間層は西欧社会を身近に感じるようになるが、広島における資本家は、清酒醸造業をはじめとする幕政以来の商工業者が依然強い力を持つ。つまり、器の外は「砂」が積もり続けたのに対し、器のなかは次第に「泥」が溜まっていった。「国産品愛用展」や「合理化展」が開催された一九三〇年前後までのおよそ一〇年間、「泥」は器に溜まり続けた。ただし、この「泥」には産業振興に直接関わらない、美術という名の「ガラスの欠片」が混ざっていて、器の外の「砂」との差は見分け辛くなっていた。

満州事変後、販路開拓と大陸侵略が一体化したことにより、堆積するものがそれ以前と変わる。新しい堆積物は保守的であるにもかかわらず対外進出の志向を持つ「土」とリベラルで前衛的ですらありながら内向きな「ガラスの粉」であった。旧来の「砂」と「泥」に満州国という有機物が混ざることによってできた「土」は、その後一五年にわたり堆積し続け、器の外も覆い尽くす。それに対し、かつては個々の煌めきを放っていた「ガラスの欠片」が時代の圧力によって細かく砕けてできた「ガラスの粉」は、以前のような煌めきを見せることもなく、「土」に代わって産業奨励館と名を変えた砂の器を埋めていった。こうした状況のなか、「土」で埋まった器の外から「ガラスの粉」は魅惑的に見え、マスコミがそれを戦意高揚媒体として利用する。最終的に軍当局は、それを殉教神話の偶像にまで祀り上げた。

上意下達とはいえ、来場者に個々の物産や商品の材質とそこに注ぎ込まれた技術を見せる場を提供していた砂の器は、多孔質で外光が入り、街なかに置かれたショウケースの趣があった。それに対し、模型や図表や美術などイメージばかりがならんだ砂の器は、窓をカーテンで覆われたブラックボックスとなっていった。この暗箱で「ガラスの粉」は異様な輝きを放ち、人はそれに陶酔したのである。

戦後、被爆したこの建物の廃墟はこの街が造営する「平和記念施設」の起点となる。それにより竣工時の状態や建ち位置によって語られることが多かった。しかしながら、建物ではなく機関としてこの施設を捉え直すならば、その中身を見守ってきた人々の記憶に注目すべきであろう。少なくとも、被爆直後の広島の資本家と地域住民の記憶には。「砂」と「泥」と「土」と「ガラスの欠片」そしてその「粉」が層をなしていたことを忘れてはならない。

＊本稿執筆にあたり広島平和記念資料館学芸員落葉裕信氏のご理解とご協力を賜りました。記してここに深謝申し上げます。

注

(1) 一八九四年（明治二七）七月二五日に始まる日清戦争は、それに先立つ広島市南端の宇品港の開港と山陽鉄道の広島までの開通にともない、この街を大陸侵略の内地における前線基地とした。続く日露戦争（一九〇四―一九〇五年）は、宇品港から大陸への出兵を恒常的なものとし、この街に人口流入をもたらす。そして、第一次世界大戦（一九一四―一九一八年）は、同市の工業化を進展させた。戦間期（一九二〇―一九三二年）、この街は経済的には停滞するが、広島文理科大学の設立（一九二九年）に代表される文化的な充実期を迎える。四度目の開戦となった十五年戦争（一九三一―一九四五年）で広島は大陸に向けて物流を増大させ、飛躍的な経済発展を遂げた。しかしながら、戦局は悪化し、原爆投下の日を迎えたのである。

(2) 同館の構造分析に関しては、その保存工事に実際に携わった佐藤重夫の以下の論文が先駆的である。佐藤重夫「広島原爆ドーム保存工事について」『日本建築学会論文報告集号外』第四二号、一九六七年一〇月。また建築様式に関する記述を含む以下の論集に詳しい。原爆ドーム世界遺産化への道編集委員会『原爆ドーム世界遺産化への道』一九九七年。設計者ヤン・レツル（Jan Letzel, 1880-1925）に関しては、菊楽忍が「空間の重層」（『広島市公文書館紀要』一六、一九九二年）を発表以来、調査と研究を進め、一九年後に発表した論文「ヤン・レツル再考」（『広島市公文書館紀要』二五、二〇一一年）において、この建築家が日本に遺した業績を明らかにした。それを引き継ぐかたちで、頴原澄子は著書『原爆ドーム　物産陳列館から広島平和記念碑へ』（吉川弘文館、二〇一六年）で、レツルが日本の近代建築史上に占める位置とその功績を検証している。また杉本俊多は「広島県物産陳列館（原爆ドーム）の建築様式について」（『日本建築学会中国支部研究報告集』第三六巻、二〇一三年）において、母校プラハ工芸美術学校との関連からレツルの読み直しを行い、従来セセッションの建築家と呼び慣わされてされてきたこの建築家の歴史主義的側面にスポットを当て、同館の建築様式がセセッションというよりもネオ・バロックに近いことを明らかにした。さらに、近代ヨーロッパにおける商業博物館の展開として日本で固有な発展を遂げた「陳列所」という施設について網羅的な研究を行った三宅拓也は著書『近代　日本〈陳列所〉研究』思文閣出版、二〇一五年）のなかで、他府県の「陳列所」との比較によって、広島県物産陳列館の建築的特徴を明らかにした。

(3) 本稿執筆にあたり参考にした『広島県史　近代現代資料編Ⅱ』広島県、一九七五年、『広島商工会議所九〇年史』広島商工会議所九〇年史編さん委員会、一九八二年ならびに「廣島から広島―ドームが見つめ続けた街展」図録、広島県立美術館、二〇一〇年は、同館の成立事情、運営状況を知る上での基本文献となった。

(4) 『広島商工会議所九〇年史』広島商工会議所九〇年史編さん委員会、一九八二年、五〇頁、八〇四頁。陸奥が認可の指令を出したのが同年一月一日、申請者が認可を受けたのが翌二日であった。

(5) 三宅拓也『近代　日本〈陳列所〉研究』思文閣出版、二〇一五年、三頁、九頁。ただし三宅は同書において、①参考品と特産品の蒐集と陳列、②展覧会や共進会の開催、③商工業に関する調査と紹介、④同じくその指導・補助・取引斡旋の順に陳列所の業務を挙げている。

(6) 一九〇三年三月一日には、広島市物産陳列所が開設されていた。

(7) 註(3)前出『広島商工会議所九〇年史』、七三頁。

(8) 「八〇　商品陳列所の建議　明治三五・六・二四」『広島県史　近代現代資料編Ⅱ』広島県、一九七五年、六六八頁。ただし、ここに引用した調査員の発言は、桐山の建議に含まれているものである。

(9) 「八二　広島市会の物産陳列所設置意見書　明治四三・八・三〇」『広島県史　近代現代資料編Ⅱ』広島県、一九七五年、六六九―六七〇頁。

(10) 註(3)前出『広島商工会議所九〇年史』、五五頁。

(11) 同前、六二頁。商業会議所条例（一八九〇年公布施行）に代わり公布された商業会議所法は、営業税、鉱業税、取引所税納付者の納付額を会員加入の基準とし、商業会議所に会費の強制徴収権を認めた。したがって、これにより納税額の多寡が商業会議所における発言力に影響を及ぼすようになる。

(12) 「1　大正デモクラシー期の政治」『広島県史　近代2　通史Ⅳ』広島県、一九八一年、九―一〇頁。早速の芸備日日新聞支持者による政治運動は、第三次桂内閣総辞職後の一九一三年二月一六日には、中国新聞社襲撃事件にまで発展した。

(13) 一八九七年（明治三〇）に陸軍中央糧秣廠宇品支廠が開設。一九〇四年（明治三七）には陸軍被服廠広島派出所が設置され、この街の軍需産業化はすでに進展を見せていた。

(14) 頴原澄子『原爆ドーム　物産陳列館から広島平和記念碑へ』吉川弘文館、二〇一六年、二四頁による。その内訳は、「初年

度一万円、二年度四万円、三年度四万円、最終四年度二万四〇四円」であった。

(15) 同前、三一頁。及び、菊楽忍「空間の重層」『広島市公文書館紀要』一六、一九九二年。菊楽忍「ヤン・レツル再考」『広島市公文書館紀要』二五、二〇一一年。

(16) 杉本俊多「広島県物産陳列館（原爆ドーム）の建築様式について」『日本建築学会中国支部研究報告集』第三六巻、二〇一三年、八八七―八九〇頁。

(17) 『物産陳列館から原爆ドームへ―75年の歴史　被爆45周年記念展』図録、広島市公文書館、一九九〇年八月、一頁。

(18) 同前、九頁。レツルが来広した日は一九一三年（大正二）七月二一日。

(19) 三宅拓也『近代　日本〈陳列所〉研究』思文閣出版、二〇一五年、二七九―二八七頁。

(20) 「博覧会の配置図発見　原爆ドーム前身　広島県物産陳列館」『中国新聞』二〇一六年八月一一日朝刊。

(21) 註(3)前出『広島商工会議所九〇年史』、一二七頁。

(22) 同前。

(23) 同前、一二七―一二八頁。一九一五年一〇月一五日、広島商業会議所が広島県に提出した「広島県工業試験場拡張建議」は次のように始まっている。「時局以来我が内地及び東亜南洋に於ける欧州品の欠乏漸く加はるに従ひ其代用品の需要は我が工業界に好影響を齎し輸出品の増進は海外に販路を拡張し輸入代用品は優に自給の域に達し各其工業の基礎を確立せしめんとする」。

(24) 「八三　広島県物産陳列館開館　大正四・八・一六『芸備日日新聞』」『広島県史　近代現代資料編Ⅱ』広島県、一九七五年、六七一頁。

(25) 共進会出品点数は、農産部三、九二八点、林業部四〇八点、水産部四六二点、食品部一、〇四七点、工業部四、五七六点、特許部八九点であった。したがって、農業部と林業部以外の総計は六、一七四点となる。『広島県物産共進会事務報告』広島県物産共進会協賛会、一九一六年、二頁。

(26) 同前。

(27) ただし、編集には同館名が記され、執筆も同館職員によるものと考えられるが、それぞれの記事の執筆者の個人名の記載はない。

(28)「英領印度の外國貿易」『広島県物産陳列館報告』一九一六年七月二〇日発行、一―五頁。
(29)「玩具貿易事情」『広島県物産陳列館報告』一九一六年七月二〇日発行、五―一五頁。
(30)「臺灣の重要移出入品」『広島県物産陳列館報告』一九一六年七月二〇日発行、一六―二二頁。「英領印度の外國貿易」の記事に較べ、木材や天然繊維の原材料など「臺灣の重要産物にして本縣に於て利用し得べき見込みあるもの」に多くの頁を割いている。
(31)永澤謙三『玩具叢書　玩具工業篇』雄山閣、一九三四年、八四―八六頁。大蔵省の統計によれば、一九一四年の玩具輸出額は三、五九一、七一五円、一九一八年は一〇、一九〇、〇三八円であった。
(32)『中国新聞』一九一八年三月二四日。
(33)同前。
(34)宮崎佳都夫『似島の口伝と史実』似島連合町内会郷土史編纂委員会、一九九八年、および「広島市似島臨海少年自然の家ドイツ人俘虜収容所」http://www.cf.city.hiroshima.jp/rinkai/heiwa/heiwa008/german%20prisoners%20camp.html
(35)註(19)前出三宅拓也、二四〇頁。
(36)同前。
(37)同前、二四三―二四四頁。
(38)「広島高等師範学校年表」『追懐』広島高等師範学校創立八十周年記念事業会編、八六―九二頁。
(39)「菓子飴品評会瞥見記」『中国新聞』一九二一年四月。ただし、本稿の記述は以下の記事によっている。三浦精子「広島県物産奨励館物語（4）開館七年目に開かれた全国菓子大博覧会」『広島県立図書館友の会ニュース』第四二号、二〇一一年七月、四頁。
(40)『森永製菓一〇〇年史―はばたくエンゼル、一世紀―』森永製菓、二〇〇〇年、六四―七五頁。
(41)註(39)に同じ。
(42)註(3)前出『広島商工会議所九〇年史』、一七三―一七四頁。
(43)同前、一六八―一六九頁。
(44)同前、一六七頁。

(45) 同前、一九九―二〇〇頁
(46) 『広島県史　年表　別編1』広島県、一九八四年、六三四頁。
(47) 『勅諭拝受五拾年記念時局博覧会誌』勅諭拝受五拾年記念時局博覧会協賛会、一九三七年、一八―一九頁
(48) 註(2)前出『広島商工会議所九〇年史』、二〇〇頁。
(49) 註(46)前出『広島県史　年表　別編1』、六三八頁。
(50) 『物産陳列館から原爆ドームまで』広島市公文書館、一九九〇年、五頁。
(51) 註(46)前出『広島県史　年表　別編1』、六四〇頁。
(52) 『昭和一一年　本県本邦海外貿易総計資料彙集』広島県産業奨励館、一九三七年、一―二頁。
(53) 同前、五―六頁。
(54) 同前、六―八頁。
(55) 『産業の広島県』広島県産業奨励館、一九三七年、付録一頁。
(56) 註(46)前出『広島県史　年表　別編1』、六五三頁。告示三一八号。なおこの告示において、海外六都市（大連、奉天、新京、哈爾濱、上海、天津）に加え、神戸にも事務所を置くことが告げられている。
(57) 『最近に於ける本県本邦及外国貿易の趨勢』広島県産業奨励館、一九三八年、二頁。
(58) ただし、表4二一番目にある「芸州美術協会傷病将兵士慰問献画展」のみ、後述する註(62)の資料から補足した。
(59) 河田明久「『作戦記録画小史』1937〜1945」針生一郎ほか編著『戦争と美術　1937-1945』国書刊行会、二〇〇七年初版、二〇一六年改訂版、一九四頁。
(60) 金田晋「第二次世界大戦後の広島美術の出発点の一側面―戦後広島の美術的展開〔1〕―」『日本社会論および国際社会論からみた広島についての総合的研究：特定研究・研究報告書』、一九八九年、二六二頁。
(61) 出原均「靉光目の《目のある風景》とその周辺」『藝術研究』第五号、広島芸術学研究会、一九九二年、三五―四七頁。
(62) 飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』藝華書院、二〇一三年、一二七頁。
(63) 佐伯卓造「芸州美術協会同人　傷病将兵慰問献画展覧会」『実現』実現社、一九三七年一〇月号、三頁。ただし、この丸木評は、佐伯が広隆群氏による展評を引用したものである。

(64) 佐伯卓造『実現』実現社、一九三八年一月号、四頁。

(65) 註(62)前出飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』、三〇九頁。なお鍵括弧内の文章は同書が『塔影』第五号、七二頁からの引用したものである。

(66) 同展は、一九四〇年中に、大連、奉天、新京、ハルピン、札幌、函館、仙台、鹿児島、広島、熊本、長崎の各都市で開催された。註(62)前出飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』、三〇九頁。

(67) その内訳は、戦線一三二点、白衣の勇士一八点、占拠地八三点、銃後四二点、スケッチ四六点。註(62)飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』、三一一頁。

(68) 註(62)前出飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』、三〇九―三一〇頁。『塔影』第五号、七二―七三頁からの引用。

(69) 児島喜久雄「聖戦美術展　洋画評1」『東京朝日新聞』一九三九年七月一一日。ただし、註(62)前出飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』、三一〇頁による。

(70) 註(62)前出飯野正仁編著『戦時下日本美術年表』、五九四―五九六頁。

(71) 『中国新聞』一九四三年一二月八日。

(72) 註(59)前出河田明久「『作戦記録画小史』1937～1945」、一六〇頁。

(73) 註(46)前出『広島県史　年表　別編1』、六七三頁。同記録は『広島県議会史』によっている。

(74) 『新修　広島市史　第三巻　政治史編』広島市、一九五八年、六四七―六四九頁。

図版出典一覧

図1　『松島公園経営報告書』宮城県内務部、大正四年三月発行より

図2　広島物産陳列館遠望〔元安河畔〕広島市公文書館所蔵絵葉書 70300_003

図3　Novinky Muzea východních Čech v Hradec Králové　http://www.muzeumhk.cz/charakteristika-muzea77961.html

図4　The Kurhaus in Merano, South Tyrol, Italy, a Stile Liberty　https://www.alamy.com/the-kurhaus-in-merano-south-tyrol-italy-a-stile-liberty-art-nouveau-image157237483.html

図5　奥一浩氏寄贈　広島平和記念資料館所蔵　識別コード 9199-0282（部分拡大）

図6　広島県物産陳列館設計図　建築世界社、一九一四年、広島市立中央図書館所蔵
図7　奥一浩氏寄贈　広島平和記念資料館所蔵　識別コード 9199-0282（部分拡大）
図8　奥一浩氏寄贈　広島平和記念資料館所蔵　識別コード 9199-0281（部分拡大）
図9・10・11　広島市公文書館所蔵『記念写真帖　広島県物産共進会　大正4年』（固有番号 14859）
図12　広島県立文書館所蔵［絵葉書］（広島県物産陳列館）［請求記号］：200407 / 1088
図13　国立国会図書館デジタルコレクション―広島県物産陳列館報告　http : //dl.ndl.go.jp/info : ndljp/pid/930257
図14　国立国会図書館デジタルコレクション―内外商工彙報　http : //dl.ndl.go.jp/info : ndljp/pid/930258/6
図15　宮崎佳都夫氏寄贈　広島市似島臨海少年自然の家　ドイツ人俘虜収容所　http : //www.cf.city.hiroshima.jp/rinkai/heiwa/heiwa008/german%20prisoners%20camp.html
図16　「テオドール・エアハルト写真帳」より藤井寛氏寄贈　広島市似島臨海少年自然の家　ドイツ人俘虜収容所　http : //www.cf.city.hiroshima.jp/rinkai/heiwa/heiwa008/german%20prisoners%20camp.html
図17・18　広島市公文書館所蔵『弟四回菓子飴大品評会写真帖』大阪菓子同業組合、一九二一年より
図19　国立国会図書館デジタルコレクション―勅諭拝受五十年記念時局博覧会協賛会誌　http : //dl.ndl.go.jp/info : ndljp/pid/1112912
図20　満州国国有鉄道（満州国の鉄道路線図　一九四五年八月）　https : //ja.wikipedia.org/wiki/満州国国有鉄道